

アリマドール  
— Prima Doll —

星語り  
Hoshigatari



執筆／丘野塔也・魁  
絵／浅見百合子・まろやか



アリマドール  
— Prima Doll —

星語り  
Hoshigatari



執筆／丘野塔也・魁  
絵／浅見百合子・まろやか



# プリマドール

*Prima Doll*

Metal statues which resemble living human girls.  
They understand the mind and have an inner voice.

『プリマドール 無名典礼』初回限定版特典  
interlude 総集編

星語り



黒猫亭にようことそ

マイクと人形と

月とたいやき

大切な友達

早春の珈琲

蒸気と活動写真

異邦の給仕人形

満月の夜

夏の呼び声

夏の花火

日記の書き方

歌と踊れば

B A R 黒猫亭にようことそ

灰桜の特製メニューア帳

薰り高き秘密

買い出しのイロハ

黒猫亭のおばけ

それぞれの意味

60

65

71

78

83

89

96

103

110

54

49

42

35

29

22

16

10

3



黒猫亭にようこと

執筆／丘野塔也

挿絵／まろやか



錆鼠色のドアを開けると、わずかな軋みに続いて、

ドアベルの涼やかな音色が響いた。フィラメント電球

が薄暗く照らす店内から一転して、どこまでも青い空

が広がっている。ざわめくように満開の桜が揺れ、着物の振り袖がはためいた。遠くからは路面電車の鐘の音。行き交う人々の装いも軽い。京都の朝はうららかな春に包まれていた。

灰桜「よいしょ、よいしょ……」

灰桜は、店内からえつちらおつちら看板を抱いてくる。木製の折りたみ看板で、サインプレートはプリキ製。丈夫で、ちょっとぐらいいの風にはびくともしないが、取り回しは良くない。機械人形にはこの程度の重さは問題にならないが、バランスの悪さだけは如何ともしがたい。

苦労しながら軒先に設置すると、ぽつと細い煙突から蒸気が漏れる。そんな様子を見て、通りがかった人がふと視線を向けた。一見すると可愛らしげな給仕だが、背中には不釣り合いな鈍色の背嚢。そんな違和感が気になつたのだろう。

くるりと瑠璃色の瞳を向けると、につこりと愛らし

く微笑んだ。

灰桜「喫茶黒猫亭、開店しますっ！」



灰桜「さつきのお客さん、逃してしまいましたあ

……」

黒猫亭の店内。メニューを抱えて、灰桜は項垂れる。

灰桜「わたしの笑顔がよくなかったのでしょーか

むにむにむに。ほっぺたをつねつね、壁掛けの鏡に映る姿を眺めている。

宇佐美「たまたま気分じやなかつたのかもね」

その背後、厨房でなにやら手を動かしている姿。蝶ネクタイに黒いエプロン。短く切りそろえられた髪。表情にはまだ幼さが残っているが、仕事ぶりは手慣れている。

灰桜「宇佐美さん……ですがわたしを見て、驚いた様子でして」

宇佐美「おつと、ここでは店長って呼んでくれないと」

灰桜「みゅつ、申し訳ありません、うさ店長」

宇佐美「うさ店長つて……ま、いいけどさ」

呼び名に少し不満があるようだが、鷹揚に受け流す。

宇佐美「きっと、人形に慣れていなかつたんだよ」

灰桜「そういえば、お若い方でした」

宇佐美「出征していなければ、人形に触れあう機会もないからね」

灰桜「なるほど、そういうのですか」

宇佐美「そのうちお客様がやつてくるよ」

灰桜「ですが、昨日はひとりもいらつしやいませんでした」

宇佐美「汗ばむぐらいの小春日和だつたから、ぽかぽかの紅茶の気分じやなかつたのかもね」

灰桜「黒猫亭には冷たいアイスティーも用意しているのですが」

宇佐美「夜になると冷え込むから、お腹を壊さないようになつたのかもね」

灰桜「お店の前には、人手もたくさんあつたのですが」

宇佐美「みんなお花見にいつてるんだよ、ちょうど満開だからね」

灰桜「ですがー……」

宇佐美「きつと来るよ。それまで新メニューの試食な

んてどうかな?」

うさ店長はそう言うと、グラスをカウンターに置く。

グラスの上には乳白色の滑らかなアイスクリーム。

添えられているのはバナナ。全体を黒いソースが覆つ

ていて、その上からクルミがまぶされている。

灰桜「みゅみゅつ、これはなんでしょうか?」

宇佐美「黒糖サンデーってところかな」

灰桜「この黒いのが黒糖なのですか?」

宇佐美「本当はチョコソースで作るらしいんだけどね、なかなか国内に入つてこなくつて。だから黒糖を煮詰

めて蜜にしてみたんだよ」

灰桜「おいひいです!」

宇佐美「早いね……」

いつの間にやらパフェスペーンを手にして、もぐもぐと頬張つていた。

灰桜「このメニューなら、いっぱいお客様が来てくれるはずです!」

宇佐美「ならないんだけど」

灰桜「黒猫亭にいっぱいのお客さんが訪れる……いま一番の願いです」

宇佐美「じや、ポスターでも貼つておこうか」

灰桜「しゅてきです！」

なおもサンデーを頬張りながら頷いている。

宇佐美「でも、ボスターだけじやなあ……いい宣伝方

法があるといいんだけど」

壁掛け時計が正午を告げる。

ぼんぼんという鐘の低音に混じって、遠くから軽妙な音色が響いてきた。

灰桜「あれはなんでしょーか？」

灰桜はたたつと帯を揺らして、窓際に張り付く。

微妙に外が見えないらしくて、ぴょんぴょんと飛び上がっている。

宇佐美「あれは市中音楽隊のパレードだね」

うさ店長も灰桜の後ろから、ちょっぴり背伸びして通りを覗き込む。

宇佐美「そういうえば六区のキヤバレーが再開するらし

いよ。その宣伝じゃないかな」

灰桜「そうだ、いいこと思いつきました！」

ぱっと蒸気が噴き出す。

さつき食べた黒糖サンデーのせいか、若干カラメルのよう匂いがした。

灰桜「わたしたちもパレードをしてみたらどうでしょ

うかっ!?」

宇佐美「パレード？」

灰桜「はいっ！ 皆さんでこう楽器を弾いて、街を練り歩くんです」

宇佐美「それは、練習しなくちゃね……灰桜はなにを担当する？」

灰桜「歌をうたいます！」

ぱあっと明るい顔をして、そう声を上げる。まるでそうするのが当然だと言わんばかりに。

灰桜「あれ、でもわたし……」

首を傾げる灰桜。記憶をたぐるように、なにやら思っている。

灰桜「人形は歌えるのでしょうか？」

宇佐美「どうだろうね。練習してみようか？」

うさ店長は店内のラジオ機に歩み寄ると、チャンネルを合わせた。雑音のあと、流行の歌謡曲が流れ始めた。

灰桜「はいっ」

高らかに歌い出す灰桜。

それは音程もなにもかもばらばらで、とても歌とは言えないものだつたけれども。

宇佐美「上手だよ、灰桜」

うさ店長は和やかな顔で、そう拍手した。

宇佐美「おや？」

からからとドアベルが鳴る。

灰桜「い、いらっしゃいま——」

灰桜が慌てて出迎えようとしたところで、

月下「調子外れの歌が、表まで聞こえていたであります」

ぴよこりと顔を覗かせたのは、灰桜よりもさらに小さな人形。

おかっぱに揃えた亞麻色の髪をさらさらとなびかせている。

背中には大きな風呂敷袋。

灰桜「月下さん、お帰りなさい！」

宇佐美「待望のお客さんかと思つたよ」

月下「人手が足りないかと思つて、早めに戻つてきたのですが」

涼しげな目元を店内に向ける。

月下「その必要はなかつたようあります」

灰桜「なので歌をうたつて、呼び込もうとしていたんです」

月下「歌？」

灰桜「はい、市中音楽隊のように街を歩く……いま一

番の願いです！」

宇佐美「さっきは黒猫亭をいっぱいにすることって

言つてたけど

灰桜「結果としてたくさんお客様が来るので、同じです」

えつへんと胸を張る。

月下「レコードでも扱いだほうがいいであります」

灰桜「頑張つて練習しますよ！」

月下「無理でありますよう。灰桜は……」

宇佐美「きっと、これからだよ」

何か言いたげな顔の月下。

うさ店長が柔らかく微笑むと、そのまま言葉を飲み込んだ。

月下「……だといいのですが。こちら、買って参りました」

風呂敷包みを解くと、どさどさと机に置いていく。

無機質な紙袋に「脱脂粉乳」の文字が印刷されている。

宇佐美「ありがとう、こんなにたくさん」

月下「ちょうど北国からの荷物が届いたばかりでした

ので、幸運でした」

宇佐美「これでいっぱいアイスクリームが作れるよ」

月下「生乳があれば、なお良かつたのですが」

宇佐美「それは望み薄かな。それに、瓶詰め牛乳は持つ

て帰るには重すぎるよ」

月下「自分は人形なので、重さは関係ありません」

宇佐美「その時はみんなでいこう。じゃあ、これは厨

房に仕舞つておくね」

灰桜「あ、お手伝いします！」

宇佐美「いいの？」

灰桜「はい、わたしお役に立ちます！」

ふたりで紙袋を分担する。

灰桜「みゅみゅ……」

どこかふらつきながら厨房へと向かっている。

宇佐美「ちょっと、大丈夫？」

灰桜「重さは大丈夫なのですが、重心があああ」

月下「……手を貸すであります」

灰桜「面白いです（……）」

みんなで協力して、厨房の収納の中に片付けた。

月下「ところで、鴉羽はどこに？」

エプロンを直しながら、月下がそう聞いてくる。

宇佐美「オーナーの用事でお出かけだよ、もう戻つて

くると思うけど……」

からから、とまたドアベルが鳴る。

宇佐美「あれ、戻ってきた？」

灰桜「みゅつ、お客様です！」

宇佐美「え、本当？」

灰桜「はい、お出迎えします！」

慌ててメニュー表を抱えている。

灰桜「いらっしゃいませ、お客様つ」

たたたた、と灰桜は入り口に歩み寄る。

かすかな蒸気と共に、とびきりの笑顔を向けた。

灰桜「喫茶黒猫亭にようこそっ！」





マイクと人形と

執筆／魁

挿絵／まろやか



本日最後の客が会計を済ませて店を出ていく。

黒猫亭のリーダーである鴉羽は、お礼と感謝を込めて、お客様をお店の外まで見送った。

鴉羽「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております」

背筋を伸ばしたまま、まるで測ったかのように綺麗な45度のお辞儀は、凛とした気品さえ感じる。

鴉羽の濡れたような艶をまとった黒い総髪と、青を基調とした矢絣模様の袖が風になびいた。

辺りはすっかり暗く、日中の陽気が嘘のような冷たい空気へと変わっていた。

店から遠ざかっていく客もその風に、寒そうに背を丸め肩を縮めていた。

月下「外気温は8度といったところであります。人間はまだ越冬装備が必要な気温です」

鴉羽「あたしたち人形は数字でしか分からないものね」

客の背中を見送る鴉羽のすぐ傍で、月下が小さな体で自分と同じほどの大きさの看板をたたみ両手で持ち上げる。

歩幅を小さくしながら、上手にバランスを取り店内

に向かう。

鴉羽「月下？ 看板を仕舞うのは灰桜の仕事でしょ？」

月下「灰桜は、新しい備品に夢中であります」

鴉羽「あんの子は（……）」

額を押さえながら鴉羽はブルブルと体を震わせる。  
月下「あんな物を持って帰ってきた鴉羽にも責任はあります」

鴉羽「そ、それは……いつかは使えるようになるといいなと思つて……」

鴉羽は月下の半眼に、ばつの悪そうな顔をして目を背けた。

月下「ですが、その考えには賛同であります」

一瞬だけ目元が優しくなった。

それにつられるように、鴉羽も少し頬を緩めた——  
……が、すぐに引き締める。

鴉羽「と、とりあえず、職務怠慢は問題よ。黒猫亭の人形としての決まりは守つてもらうわ」

そう言いながら目尻に力を込める、踵を返して黒猫亭の店内へ大股歩きで戻った。

鴉羽「灰桜！」

鴉羽は、閉店して客がいないのを良いことに、普段ではしない勢いで店のドアを開け放つ。

ドアベルがカラ～ン！ 大きく鳴った。

灰桜「みゅっ！」

店内に桜が舞っていた。

違う。桜に見えたのは、着物の振り袖の模様だ。

無人の店内で新米の自律人形<sup>オートマタ</sup>、灰桜がマイクを片手

にボーズを取っていた。

鴉羽「…………」

灰桜「…………」

しばし時間が止まり———灰桜の背に取り付けられたいる鈍色の背嚢から突き出た煙突が、ぼんと蒸気をひとつ噴き出す。

鴉羽「はーいーざーくーらー、閉店作業もしないで何を遊んでいるの！」

灰桜「ご、ごべんなひやい、ごべんなひやい！」

灰桜が両頬をむにむにと摘まられる。黒猫亭では見慣れた光景だった。

灰桜「その……黒猫亭にマイクとスピーカーがやってきたので我慢できなくて……」

鴉羽「別にこれは、あなたのために設置したわけじや

ないのよ」

灰桜「みゅ、……」

月下「嘘であります」

灰桜「みゅっ？」

看板を持って店内に戻ってきた月下が、事も無げに

言い放つ。

月下「灰桜が歌に興味を持ったのを知って、鴉羽がオーナーに申請したであります」

鴉羽「ちょっと！ 月下?!」

灰桜「鴉羽さん！」

顔を真っ赤にして慌てる鴉羽。

それに対し、灰桜は瑠璃色の瞳を輝かせて鴉羽を見上げている。

鴉羽「あたしは、黒猫亭で少しでもお客様の為になる事があるなら、なんでも取り入れていきたいと思つているだけよ」

宇佐美「うん、そうだね。だからオーナーも許可をくれたわけだし」

厨房から、うさ店長がタオルで手を拭きながら現れる。

宇佐美「みんなが自発的にやりたいということを、ボ

クらは積極的に協力するよ」

灰桜「うさ店長！」

宇佐美「はは、その呼び方、もう定着しちゃったね」

苦笑しつつもまんざらでは無い様子だった。

灰桜「あのっ！ うたってみても良いでしょうか？」

マイクスタンンドを両手でぎゅっと握りしめながら、

灰桜はうさ店長に期待に満ちた目を向ける。

鴉羽「ダメよ、灰桜。先に閉店作業を終わらせてからよ」

灰桜「みゅみゅつ……」

宇佐美「一曲くらいいいんじゃないかな。スピーカーの試験もしておきたいし」

鴉羽「店長！」

宇佐美「みんなが自発的にやりたいということを、積極的に協力するよ」

鴉羽「そのセリフ気にいったの？ 優しさと甘やかしは別よ」

宇佐美「だけど、やりたいことに気を取られて作業が疎かになるくらいなら、先にすつきりさせておいた方が良くないかな」

月下「合理的であります」

月下は頷いて、自分の耳に指を突っ込んだ。

鴉羽「月下まで！」

反対しているのが自分だけと知り、鴉羽は頭を抱える。

鴉羽「……一曲だけ。一曲だけよ、灰桜」

灰桜「はいっ！」

うさ店長、鴉羽、月下が見ている中で、改めてマイ

クの前に立つ灰桜。

抑えきれないわくわく感が、瞳に表れていた。

灰桜「では、僭越ながら灰桜、うたわせていただきますっ」

灰桜の口上を合図に、月下がレコードに針を落とす。

蓄音機から流行の歌謡曲の前奏が流れ始める。

鴉羽は胸の前で腕を組みながら、先程までとは打つて変わって優しい目で灰桜を見ていた。

宇佐美「そういうえば、このマイクとスピーカーはオーナーの手配だったけど、どこから？」

月下「軍からの放出品であります」

宇佐美「……軍仕様？」

月下「そうであります」



宇佐美「なるほど」

それに倣つて、うさ店長も自分の耳に指を突っ込む。  
すう……と、灰桜が息を大きく吸う。

灰桜「～～～～～～♪」

メロディーを無視したリズムの狂った歌を高らかに  
うたう。

その声がマイクを通して、無調整の軍用スピーカー  
から波となって放出された。

音の暴力が店内に響き、窓や食器がビリビリと震え  
た。

耳を塞いでいなかつた鶉羽は、ぽふつと背嚢の煙突  
から蒸気を噴いて倒れる。

灰桜はそれに気づくこと無く、気持ちよさそうにう  
たい続けていた。

——そして翌日……

昨夜の黒猫亭からの騒音問題に、近隣の人たちに頭  
を下げ続ける鶉羽の姿があつたとか。

宇佐美「とりあえず、お客様に披露するには時間が  
かかりそうだね」

月下「機材、灰桜の歌唱力共に調整が必要と上申させ

マイクと人形と

ていたらあります」

灰桜「みゅ？」

話の中心にいるはずの灰桜だけが、不思議そう首を傾げていた。



月とたいやき

執筆／丘野塔也

挿絵／まろやか



日が暮れると、窓の外にはまん丸のお月様が輝いていた。

ボクは厨房に立つて、ポウルをしつかり抱えていた。

卵黄と砂糖、それによく冷やした牛乳を混ぜ合わせる。その淡黄色はまるで小さなお月様みたいだと思った。バニラビーンズの煎汁を少量混ぜ合わせると、甘く華やかな香りが厨房を包み込む。氷を満たしたグラスに注いで、最後にさくらんぼのシロップ漬けをひとつ。

宇佐美「7番テーブル、ミルクセーキおまちどおさま」

銀のソーサーに載せて、カウンターに載せる。

月下「了解であります」

ちょっとだけ背伸びして、器用に飲み物を受け取る。

月下は背筋をぴんと伸ばして、きびきびと給仕をして

いる。テーブルに着くと見本のようなお辞儀をして、そつと飲み物を差し出している。グラスの水面はまったく揺れず水平を保つたままだ。見た目は可愛らしい女の子なのだが、その仕草はなんとも堂に入つたもので、そのズレがなんとも面白い。

伝票を置くと、最後にまた一礼して待機位置へと戻っていく。しゅっと微かな蒸気が背嚢から漏れる。

鈍色の羽根が、歩くたびに微妙に揺れていた。  
灰桜「お仕事中の月下さん、姿勢がとてもきれいですね……」

隣で皿洗いをしている灰桜が、うつとりとした声を上げる。踏み台に乗っているので、背の低い灰桜でもフロアの様子がよく見回せるようだ。

灰桜「あんな風にテキパキご注文をお届けするようになりたいですっ！」

宇佐美「灰桜には、灰桜の良さがあるよ」

灰桜「ですが、見習いませんと！」

鼻息も荒く、意気込みを新たにしている。

灰桜「それにしても……」

宇佐美「うん？」

灰桜「月下さんの背嚢には、なぜ羽根が付いているのでしょうか……？」

宇佐美「それは、えっと……」

ふと声に出した灰桜の疑問。

ずっとそれが当たり前のように接してきたが、他の人形とは随分違っている。灰桜もしかりだが、シンプルなランドセル型で、右側から煙突だけが伸びている。

それを考えると特異な存在だ。

宇佐美「じゃあ、本人に聞いてみようよ。月下？」

月下「呼びましたか」

何か仕事だと思ったのだろうか、背筋を伸ばしてステッタとやってくる。

宇佐美「月下的背中の羽根は、何のために付いているのかって」

月下「それは……」

今更の質問だと言いたげに、ちらりと背後を見つめる。

月下「羽根の役割は、言うまでもないであります」

宇佐美「それはもちろん……飛ぶため？」

灰桜「みゅっ、飛ぶっ!?」

月下「ずっと以前、説明しましたが」

灰桜「すみません、わたし忘れっぽくて……」

小さく息をつく月下。なにやら言いたげだったが、それはいったん飲み込んだ様子。

月下「月下は偵察用戦闘人形であります。戦時中は部隊に先行して、敵軍の情報収集任務にあたっておりました。この羽根はその時の名残であります」

灰桜「なるほど、なるほど。特別なんですね！」

月下「規格が合うのがこれしかないであります」

灰桜「あの、お願いがあるんですが」

月下「なんであります？」

灰桜「飛んでいるところ、見たいです！」

月下「お断りであります」

ぶりっとそっぽを向いてしまう月下。にべもない。

月下「見世物ではないであります」

灰桜「でも、きっとカッコイイと思うんですけど……」

月下「飛ぶのは任務の時だけであります。そのような私的な利用は認められないであります」

宇佐美「ま、まあまあ……ふたりとも」

灰桜と月下を宥めていると、ドアベルが涼しげな音を立てた。

鴉羽「いま戻ったわ」

お客様かと思ったら、鴉羽さんだった。

確かにオーナーの元へお使いに行つていたはずだ。

胸元には、小さな紙袋を抱えている。

灰桜「みゅみゅ、いい匂いがします……！」

確かに、微かに香ばしい匂いがする。

月下「鴉羽、それはもしかして……？」

灰桜はともかく、珍しく月下も食いついている。

鴉羽「わたしからのお土産よ」

そつと厨房の中に差し入れてくれる。そつと中を覗いてみると……

宇佐美「たいやきだ！」

月下「…………！」

灰桜「おいしそうです！」

まだ温かいたいやきが三尾入っていた。

珍しく、月下も目を見開いて反応している。

鴉羽「交代するわ。月下、灰桜、今日はもう遅いし、

上がつていいわよ」

灰桜「は、はい！」

月下「了解であります……！」



宇佐美「く、詳しいね……」

月下はたいやきに特別のこだわりがある。だからこそ鴉羽さんも買ってきただろうけど。

鴉羽「その理由は簡単よ」

ちょうど厨房に顔を見せた鴉羽さんが、ぱちりと片目をつぶる。

宇佐美「尻尾までぎっしりだね」

厨房の隅で、早速厚意に甘える。ボクは正確には勤務中のんだけど、いまはお客様もいないので、つい

鴉羽「六区に支店が出来たらしいの。開店記念で今日は特売だって」

月下は頂戴した。

月下はと言うと、黙々と小さな口を動かしている。

宇佐美「おいしいよね、月下」

月下「これは本物のたいやきであります」

じつと断面を見つめながら唸っている。

月下「おそらく、繁昌亭のたいやきでありますよう

宇佐美「え、分かるの？」

月下「他店とは餡子の配合が違うので一目瞭然であります。しかし、二区本店からここまで路面電車で一小時間ほど……なのにまだ温かい……解せぬであります……」

月下「特売でありますか……！」  
宇佐美「それはお得ですね。もしかして、いまから行けば……？」

灰桜「みゅみゅ、たいやき食べ放題ですか……！」  
月下「食べ放題……！」

なにやら興奮しているふたり。さすがにそこまで安くはないだろうけど。

鶴羽「残念、もう閉店時間よ」

月下「え……」

鶴羽「あと10分ぐらいかしら。とても間に合わないわね……今日限りと言っていたから……」

ちらりと壁掛け時計を見つめる。そういうえば、もう夜も遅い時間だ。

月下「……あと10分」

しばし考え込んでいる月下。

灰桜「はっ……もしかして月下さん！」

ぴょん、と飛び上がって、ある事実に気付いている。

灰桜「飛べば間に合うのでは……？」

月下「とんでもないでありますっ」

ぶんぶんと短い髪を横に振っている。

月下「月下は偵察用戦闘人形であります。この羽根は任務の時に使うものであり、私的利用は断じて認められないであります……」

鶴羽さんは苦笑している。  
宇佐美「あのさ、月下」

だから、ボクはエプロンのポケットを探つた。  
今朝、お大尽のお客さんからもらったチップがそのまま入っている。

月下「……」

宇佐美「よかつたら、お使いに行つてくれないかな？  
たいやき、もつと食べたいんだよ」

月下「……」

じつとお札を見つめている。

やがてぱくぱくとたいやきを食べ尽くして、口元をきれいに拭いていた。

月下「……任務でしたら」

宇佐美「よろしくね」

鶴羽「安全飛行で行くのよ」

灰桜「いつてらっしゃいませ、月下さん！」



宇佐美「あ、帰ってきた」

黒猫亭の玄関口に出て、空を見上げる。

満月を背にして、ものすごいスピードで帰投する月  
下の姿があった。

首からは風呂敷包みを提げている。

宇佐美「……どれだけ買ったんだろう」

鴉羽「本当に安かったから……」

灰桜「食べ放題ですねっ」

鴉羽「あんまり食べると調子が悪くなるからダメよ」

宇佐美「うん、というか、普通に食べきれないですね  
……」

取りあえず、冷凍しておこう。

あとは網焼きで焼けばおいしくいただけるはず。

宇佐美「たいやきの二度焼きか……」

しばらく、おやつはそれで決まりのようだ。





大切な友達

執筆／魁

挿絵／まろやか



テーブルの上に置かれていたガラスのコップが、窓から差し込む日射しを受けて、天板の上に水面の模様を落としていた。

蓄音機から流れれる穏やかな音楽は、まるで店内の時間緩やかにしているようだつた。

そんな空気を楽しむように、客たちはコーヒーや紅茶を静かに楽しんでいる。

その邪魔をしないように、喫茶——黒猫亭の自律人形たちは肃々と給仕をしていた。

灰桜「んみゅみゅみゅー！」

否、そのうちのひとり、桜色の着物をきた少女が、

何もない場所で蹴躡いて悲鳴を上げた。

手にしていたお盆と、その上に乗せていた白磁のカップが宙を舞う。

だけど、そのお盆とカップを、受け止める手があつた。

軽やかに、音も立てず。

灰桜「んぎゅ！」

だけど、蹴躡いた自律人形は激しく床に顔をぶつけた。

お盆とカップを受け止めた黒い総髪と、青い矢絣柄の着物を着た少女が、床に伏した少女を睨む。

鶴羽「はいざくらあ」

灰桜「んみゅ……、鶴羽さん、ありがとうございます」

鶴羽「あんたは、どうしてそう落ち着きがないの！」

灰桜「ごめんなさい」

床に倒れたまま、顔だけを上げて涙目を鶴羽に向ける。

鶴羽「ほら、早く立ちなさい。このメニューはあたしがお出ししとくから、あんたは顔拭いて服の汚れ落としてください」

灰桜「はあい……」

失敗をしょげてか、ゆっくりと立ち上がりととぼとぼと厨房の方へ向かつた。

厨房では、うさ店長がガラスの器にアイスクリームの盛りつけを完成させたところだつた。

宇佐美「どうしたの、灰桜」

灰桜「うみゅ……また失敗してしまいました」

肩を落としたまま洗い場の前に立ち蛇口をひねる。

水を両手で受け止め、汚れた顔をパシャパシャと

洗つた。

宇佐美「ははは、それは残念だつたね」

うさ店長は笑いながらタオルを灰桜に渡す。

顔に残つた水を拭きながら、灰桜はフロアで接客し

ている鴉羽を見た。

音も立てずに、お皿やカップをテーブルに置いては、恭しく頭を下げてお客様の邪魔にならないよう静かに去る。

と思えば、コップの水が空になりそうなテーブルがあれ

れば、即座に注ぎに向かう。

別のお客さんが席を立つ時、手荷物を持ったのを確認すると、お客様が移動するより早くレジに向かい、お客様を待つ。

灰桜「鴉羽さんはすごいです。どうしてあんなに完璧にお仕事をこなせるのでしょうか？」

宇佐美「経験、かなあ」

灰桜「誰よりも早くお店で作業をして、誰よりも遅くまでお仕事をしています」

宇佐美「……ちゃんと寝てるのかな？」

灰桜「うみゅ……、わたしたちは人形なので、寝なく

ても活動はできますが……」

月下「ですが、定期的にスリープモードを取らなければ、徐々に論理機関へ負担がかかるあります」

空になつた食器を厨房に戻しに来た月下が言う。

食器を洗い場の流しに置くと、月下もフロアで接客

している鴉羽を見た。

月下「ああ見えて、鴉羽も昔は沢山失敗していたあります」

灰桜「全然想像できません」

宇佐美「でも、今は立派なりーダーだよね」

灰桜「はい、リーダーです」

月下「鴉羽も色々と学習してるであります」

三人は働く鴉羽に温かな眼差しを向けた。

が、その視線に気づいた鴉羽が、大股で——それでも足音は静かに、厨房に向かってくる。

表情は笑みのまま、だけど厨房に近づくにつれ、こめかみにピキキ……とお怒りのマークを増やしながら。

鴉羽「ふたりとも、何をサボってるのかしら？」

声はあくまで静かだけど、笑顔だけど、滲み出る怒

りは隠せていない。

灰桜「うみゅ、みゅみゅ……」

宇佐美「え？ ふたり……あれ？ 月下？」

いつの間にか月下は、お盆を持ってフロアの方へ飛んでいた。

ドアを開ける。

暗い廊下には誰もいなかつた。だけど、ひとつの部屋から灯りが薄く漏れている。

灰桜「鴉羽さん……？」

さつきの足音は、どうやら鴉羽のものだったと気づく。



——夜。

まだ寒さを感じる澄んだ空気は、月齢が新月ということもあり星空を綺麗に見させてくれていた。

黒猫亭の灯りも消え、皆静かに眠っている。

灰桜「んみゅ」

スリープモードの灰桜が不意に目を開けると、ドアの方を見た。

微妙に物音がした。誰かが、廊下を歩いていたようだ。

部屋にある時計を見ると、深夜の2時を回っている。

灰桜「こんな時間に誰でしようか……？」

ベッドを下りると、音を立てないようにゆっくりと

灰桜「もしかして、鴉羽さんは本当に寝ていないのでしょうか……？」

昼間のうき店長の心配を思い出す。さらに月下が言っていた、論理機関への負担のことも頭の中によみがえる。

急に不安になってきた灰桜は、おろおろしながら鴉羽の部屋の前まで進んだ。

灰桜「ど、どうすればいいのでしょうか……あ、そうだ」何かを思い立つたらしく、灰桜はドアの前でゆっくりと息を吸う。

そして——

灰桜「ね／＼んね／＼ん、ころ／＼り／＼よ／＼、おこ／＼ろ／＼り／＼よ／＼」

部屋の中に向かって囁くように歌い始めた。

ガチャつとドアが開く。

鴉羽「…………」

灰桜「ねんねの…………もり…………は…………」

訝しげな目をしている鴉羽に、灰桜はやや引きつつ  
た笑みを返す。

鴉羽「こんな時間に何をしてるの？」

灰桜「その、鴉羽さんが眠れるようにうたつて……み  
ました」

鴉羽の視線にいたたまれない気持ちになり、灰桜の

声は徐々に細くなっていく。

だけど、ぐつと覚悟を決めたように鴉羽の顔を見直  
す。

灰桜「か、鴉羽さん！ 夜はきちんと眠らないと、論

理機関に負担がかかつてしまします」

鴉羽「大丈夫よ。今やつていいる作業を終えたら寝るわ」

灰桜「みゅ…………でも、おひとりで頑張りすぎではない  
でしょうか？ あの、わたしもお役に立ちます」

鴉羽「まつたく…………」

鴉羽はため息を吐くが、呆れた表情ではなく微笑み  
を浮かべた。

鴉羽「入って」

誘われるまま、鴉羽の部屋に入る。初めて入った部  
屋に灰桜は感心したようになに壁や天井を見回す。  
物は少ないと、かといって殺風景ではなく。整理の  
行き届いた鴉羽らしい部屋模様だった。

鴉羽「じろじろ見ないの」

鴉羽はそう言いながら、カップに湯気の立つ甘い香  
りのする飲み物を注ぐ。

鴉羽「はい、熱いわよ」

灰桜「あ、ありがとうございます。これは…………」

鴉羽「ホットピーナツバターシエイクよ」

灰桜「どろつと濃厚ですね」

鴉羽「それがいいんじゃない。夜に飲むとまた格別よ」

鴉羽は得意げに笑うと、カップを口に寄せる。

灰桜も両手でカップを持って、一口する。

灰桜「熱いでひゅつ…………熱いのが口の中で残り続けま  
ひゅ」

鴉羽「ゆっくり飲みなさい」

舌を出しながら、涙目になつた灰桜を見ながら鴉羽  
は笑う。



灰桜は机の上に広げてあつた帳簿を見た。

そこには今日の売上げや、月の仕入れなどの数字が羅列されている。

灰桜「鴉羽さんは何でもできて凄いですね。わたしなんて、失敗ばかりで……」

声が沈んでいく灰桜のおでこを、鴉羽がツンと指先でつつく。

灰桜「みゅ？」

鴉羽「焦ることなんて無いわよ。あたしだって最初から色んなことが出来たわけじゃないんだから」

灰桜「月下さんも、そう言つていきました。昔は沢山失敗していたと」

鴉羽「そうね、あたしがやらなきやいけないんだって気持ちばかりが先走って空回りしすることも多かつたわ。誰かに頼るつてことも苦手だった」

苦笑しながら鴉羽は続ける。

鴉羽「だけどね、ある友達が教えてくれたのよ。すごく頑張る友達が、あたしの背中を押してくれた」

灰桜「それはとても素敵なお友達さんだつたんですね」

鴉羽「ええ、そうよ。本当に素敵なお友達よ」

鶴羽は昔を懐かしむように目を閉じて微笑む。

鶴羽「さてと、じやあ灰桜にも手伝つて貰おうかしら。帳簿の付け方をゆつくりでいいから覚えていきなさい」

灰桜「はい、お任せ下さい。わたし、お役に立ちます！」



早春の珈琲

執筆／丘野塔也

挿絵／まろやか



結霜ガラス越しに、星が瞬いている。

閉店後の、どこか心地よい静寂に包まれている店内。わずかに窓を開けると、新春のひんやりとした空気が吹き込んできた。

真冬の時期に感じるような、刺すような冷たさはない。肌寒さの中にわずかな暖かさを内包しているようだ。夜空を輝きが彩っている。

宇佐美「……おつと」

お湯が沸き立つ音がして、蒸氣が外に逃げ出していく。コンロの火を止めると、やかんを持ち上げた。傍らには、濾過布の上にたっぷりのせた珈琲豆。そつとお湯を落としていくと、ぽこぽこと挽き豆が膨らむと共になんとも香ばしい匂いが広がった。

宇佐美「うん、こんなものかな」

カップの半分ほど珈琲を入れて、同じくコンロで温めていたミルクを同量注ぎ入れる。たっぷりの砂糖を入れると、ミルクコーヒーの出来上がりだ。

宇佐美（ほうきば）「簪星さん、味見してもらつてもいいですか？」

厨房にいる人形に声をかける。

簪星「うーん……」

キッキン台の前でじっとしながら、なにやら上の空。手にはカタログのようなものを持っている。

宇佐美「簪星さん？」

簪星「あつ……はい、ごめんなさい。ぼーとしちゃつてました」

小さく声をかけると、弾けるように顔を上げる。

宇佐美「珍しいですね」

簪星「つい、うつかり。ミルクコーヒーの試飲ですねえ」両手でカップを受け取っている。

簪星さんは、ここ喫茶黒猫亭の人形だ。厨房係で、飲み物や料理のレシピはすべて彼女が作ったもの。筆まねの彼女は事細かに調理法をノートに記してくれてるので、それを参考すれば同じように料理を作ることが出来る。とはいっても、何事にもコツはあるもので、まったく同じおいしさというわけにはいかない。

雇われとはいえ、ここ黒猫亭の店長としては日々練習しないといけない。そんなわけで、今日は珈琲を淹れてみたのだ。

簪星「おいしいです！」

宇佐美「本当ですか？」

篠星「はい、とつても！ 嫌な苦みもないですし、珈琲もミルクに負けないません。強いて言うなら……」

宇佐美「言うなら？」

篠星「ちょっと甘いですねえ」

宇佐美「うつ……スプーン3杯を守つたつもりなんですが」

篠星「ふふっ、山盛りにしちゃったんじゃないでしょうか」

甘い物が好きなのは事実なので、その気持ちが知らず知らずのうちに、調理の手に反映されていたのだろうか。

篠星「でも、とつてもおいしいと思います。うさ店長もどうぞ」

宇佐美「あ、すみません」

カップを返却される。燃料の都合で、人形は人間と同じものを食べすぎてはいけない。

宇佐美「ずずず……あ、おいしい……」

これならお店に出しても、なにも恥ずかしくはないだろう。ここしばらく、ずっと淹れ方を勉強した甲斐だけ

があつた。

宇佐美「ところで篠星さん、なに見てたんですか？」

篠星「実はあ……先日、出入りの業者さんからこんなカタログをいただきまして」

宇佐美「これは……サイフォン式珈琲？」

篠星「はい、なんでも蒸気圧を利用して抽出するんだそうです。皇國で商品になるのは初めてだとか」

宇佐美「なんとも不思議な形ですね」

篠星「味わいもよく、見栄えがするのでお客様も注目するのではと思いまして」

宇佐美「確かに……」

まるで実験器具のような外観。風船のような丸いガラスで出来たそのフォルムには惹きつけられる。

宇佐美「ひとつ黒猫亭に入れても良さそうですね」

篠星「わたしもそう思ったのですが、問題は値段でしたー……」

宇佐美「確かに……だいぶ、高いですね」

カタログを確認する限り、だいぶいいお値段がする。

宇佐美「うちのいまの売り上げでは、ちょっとこれは」

篠星「そうですよねえ。面白そうだと思ったんですねけ

どね……」

頬に手を当てて、小さくため息をついている。

篠星「サイフォン式珈琲、気になります……」

彼女なりに、黒猫亭の名物を作ってくれようとしたんだろう。その気持ちは嬉しいし、なんとか応えてやりたいが……。

灰桜「うさん、篠星さんっ」

篠星「灰ちゃん、お仕事お疲れ様ですよー」

ぴよんぴよんと弾むような足取りで、灰桜がやつてくれる。

灰桜「あ、あの、こんな落とし物があつたのですが、これはお金でしょうか……!?」

びらりと一枚の紙片を見せる。

宇佐美「ああ、これは新春福引きの抽選券だね」

灰桜「みゅみゅ、福引き……?」

宇佐美「簡単に言うとくじ引きさ。商店街で十銭分の買い物をすると貰えて……一等は現金が当たるらしいよ」

篠星「現金……?」

宇佐美「取りに来るかもしねないから、レジで保管して、コルクと蝶で……」

ておこう

篠星「あの、うさん店長」

宇佐美「はい？」

篠星「それに賭けましょう」

宇佐美「もしかして、サイフォン式珈琲ですか？」

篠星「もちろんです。商店街でパン五十斤、人参大根蓮根それぞれ二百本ほど買えばそれなりの抽選券が

……」

宇佐美「それ、どうやつて保管するんですか？」

篠星「パンは揚げれば日持ちしますし、野菜は酢漬けにすれば大丈夫ですよおー。あとあと、何か買う物は……」

……」

灰桜「牛乳なんていかがでしようつ！」

篠星「それでよー！ ミルクコーヒーは人気ですし、

百本ほど注文しちゃいましょうつ！」

宇佐美「冷蔵庫に入りきりませんつて！」

篠星「瓶詰めにすれば大丈夫です」

宇佐美「瓶詰め……?」

篠星「はい、従軍中作ったことがあります。瓶を煮沸



宇佐美「手段と目的が逆転してませんか？」

篠星「抽選で、現金を……サイフォン式珈琲を当てま  
しょうっ！」

灰桜「よく分かりませんが、当てましようっ！」



数日後――

宇佐美「いらっしゃいませーーー！」

篠星「いらっしゃいませ……！」

さすがに鴉羽さんに怒られてしまつて、しばらく店  
頭で呼び込みする羽目になつてしまつた。

宇佐美「揚げパン漬け物サンドはいかがですかー？」

篠星「ミルクコーヒーとのセットになりますよおー」

なんとも珍妙な組み合わせだが、道行く人は時折足  
を止めてくれる。

通行客「ほう、これは……？」

ひとりの紳士が興味深げに見つめるのは、店頭の小  
机に飾り付けた最新鋭の抽出機械。宣伝も兼ねて実演  
して見せていた。

篝星「こちらのサイフオン式珈琲で、薰り高い一杯をお淹れします！」

篝星さんは胸を張つて、得意げに説明した。



蒸氣と活動写真

執筆／丘野塔也

挿絵／まろやか



ほんのり甘い、爽やかな春の風が吹いていた。

さわざわと桜の木が揺れて、ほんの僅かな名残をとどめた花びらが舞い落ちる。

満開の花びらを咲き誇っていたのも先日までのこ

と。  
いまは青々と葉が生い茂つていて、陽光に深緑を映えさせていた。

灰桜「くんくん……」

路面電車を降りて、黒猫亭への帰宅途中。

胸に抱えた紙袋をちょっと開けて、灰桜は鼻を鳴らしていた。

宇佐美「いい匂いする？」

灰桜「とっても香ばしいです！」

篠星「珈琲豆の香りは格別ですよねえ」

弾むように歩いている灰桜の隣では、篠星さんが笑顔を見せている。

宇佐美「珈琲って、あんなに種類があるとは思いませんでした」

屋下がり、珈琲豆の卸業者さんに顔を出していた。

なんでも新しく輸入先を確保したとかで、これまで

国内では流通していなかつた産地の豆が入るようになったのだという。

興味深い話を色々と聞かせてもらつて、おまけに試供品もどつさりもらつていた。

篠星「以前はほとんど珈琲豆が手に入りませんでしたから、それを思うと夢のようですねえ」

灰桜「みゅっ、そうなのですか？」

篠星「戦時中は輸送経路が限られていましたから。輸送船が襲撃されることもありましたし、安定供給にはとてもとても……」

ほのぼのとした口調で振り返っているが、当時はそれが厳しい情勢だったことだろう。

ボクはその時まだ幼かつたので大人の事情までは思ひ至らなかつたけれど。

灰桜「珈琲が手に入らないときは、何を飲んでいたのですか？」

篠星「代用珈琲ですよ。たんぽぽやゴボウの根を煎じて飲むんです」

灰桜「みゅっ……おいしくなさそうですね」

篠星「風味は劣るんですが、意外といけますよ。いつ

か評価される時代が来るかもしませんね」

宇佐美「そんな話をしていたら、早く珈琲が飲みたくなってきますね」

少し歩き疲れてきたので、砂糖とミルクをたっぷり入れた、ぬるめの一杯をいただきたいものだ。

灰桜「うさ店長、うさ店長！」

宇佐美「うん？」

灰桜「あそこ！ 喫茶店ではありませんか？ 休んで

いってはいかがでしょーか？」

灰桜が指差す先には、珈琲カップを傾ける紳士のポスターが貼つてある。

宇佐美「試供品いつぱいもらつたから、黒猫亭に帰つてから飲もう」

箬星「灰ちゃん、それにこのお店は喫茶店ではありませんよ」

灰桜「ですが……」

箬星「あれは、活動写真的ポスターですねえ」

確かに、紳士の下には「望郷の珈琲」とタイトルが掲示されている。

灰桜「活動写真って……なんですか!?」

◇◆◇

鴉羽「活動写真っていうのはね、フィルムと映写機を使って作品を上映することよ。皇都ニュースは分かるわよね？」

灰桜「はい、街頭テレビでよく見ます！」

鴉羽「あんな感じで動く映像が流れるの。恋愛劇や時代劇……それに歌劇も楽しめるのよ」

灰桜「は……」

鴉羽「はい、ミルクコーヒー。試供品の豆を使つてみしてくれたわ」

黒猫亭に戻ると、鴉羽さんが活動写真について説明してくれる。

そして、珈琲も淹れてくれた。

鴉羽「うさ店長も、お疲れ様。お砂糖たっぷり入れておいたわ」

宇佐美「すみません」

鴉羽「箬星はブラックでいいのね」

箬星「ええ、しつかり味を確かめたいので」

それぞれカップとソーサーを受け取つて、奥のテー

ブルを閉ませてもらつていた。

この時間帯は他に来客もなく、ゆつたりとした時間が流れている。

ゆつくりとカツブを傾けて、味わい深い珈琲の味を感じていると……。

灰桜「わたし、活動写真を観てみたいです！」

ぱつと背中の煙突から蒸気を噴き上げて、おもむろに灰桜が言つた。

宇佐美「どうしたの、いきなり」

灰桜「お話を聞いて、凄く興味が出てきました。歌劇……歌や踊りのショーも觀れるのでしょうか。とつて面白そうですね」

竪星「いろんな種類がありますから、灰ちゃんがお好みの演目もあるかもしだせませんねえ」

宇佐美「だけど……」

人形は活動写真を観に行けるのだろうか？

鴉羽「やめておいたほうがいいわね」

そう疑問を覚えたところで、鴉羽さんが言つた。

鴉羽「人形が劇場に入れるかどうか分からぬわ」

宇佐美「心配でしたら、ボクが付き添いますよ。ちや

んと説明すれば大丈夫だと……」

鴉羽「問題はそれだけじゃないの」

小さくため息をついて、灰桜の後ろに立つ。ちよいちよい、と背嚢から伸びる煙突を指さした。人形にとつては燃料タンクに当たる。

鴉羽「この子、興奮すると排煙しちゃうでしょ」

宇佐美「確かに、いまもうつすら煙が出ていますね……」

指摘どおり、いまも蒸気がうつすらたなびいている。かすかに香ばしいのは、珈琲のせいだろうか。

鴉羽「狭い劇場じや、迷惑になつてしまふわ」

灰桜「我慢できますよー！ 平気ですっ」

鴉羽「本当かしら……」

月下「だつたら、試してみればいいであります」

騒ぎを聞きつけたのか、厨房から月下が顔を出した。

宇佐美「でも、うちに映写機なんてないし……」

月下「活動写真そのものでなくとも、要は気持ちを抑えられればいいのであります」

宇佐美「なるほど」

竪星「でしたら、まずは朗読劇から試してみればどう

でしょう？」

ぽん、と篝星さんが手を打つ。

篝星「わたし、本はたくさん持っていますから。持つてきますよー！」



篝星「コチコチ山の栗太郎」

黒猫亭には小さなステージがある。

元々この建物に備え付けてあつたもので、ピアノなどを使つた簡単な演奏が披露できるようになつてい

る。

いま、そこに篝星さんが上がり、椅子に浅く腰掛けながら本を開いていた。

篝星「むかしむかしあるところに、コチコチ山というそれは寒い山がありました」

朗読するのは、老若男女知らぬものはいない童話だ。灰桜はステージの前に座つて、背筋を伸ばして傾聴している。

篝星「栗太郎はお腹がペコペコ。なぜなら冬の蓄えの

栗を全部食べきつてしまつたからです……」

さすがにこの程度の朗読劇なら、灰桜もおとなしく聞いていられるだろうと思うが……。

灰桜「うつうつうつ……」

宇佐美「泣いてる？」

灰桜「お腹が空いて何も食べられないなんて、辛いで

す……！」

宇佐美「煙突！　すごく水蒸気を吹いてるよ！」

灰桜「みゅみゅみゅ……」

涙に合わせて、ぼぼぼっとまるで蒸気機関車のよう

に煙を噴き上げている。

篝星「まさか、こんな序盤で躊躇くとは思いませんでし

たねえ」

灰桜「大丈夫ですっ！　わたし、我慢できますのでっ」

篝星「最後におばあさんとの別れが待つていますが、耐えられますか？」

灰桜「え……ううつ……ううう（可哀想です）」

宇佐美「これは駄目ですね。何か他の方法は……」



う だ ゃ つ !

宇佐美「こんにちは！ 僕は猫のトラちゃんだにやー」

僕は小さな猫のぬいぐるみを手に、ステージに立つた。

宇佐美「楽しい人形劇、始まるにやー」

灰桜「わーーーー！」

次に挑戦してみたのは、人形劇だ。

簫星さんの優しげな語り口調がつい涙腺を刺激したのかもしれないと思い、できるだけ楽しげな口調を心がける。

宇佐美「あ、あそこに黒猫亭のシャノちゃんがいるにやー」

フロアの隅でうずくまっているのは、黒猫亭の飼い猫シャノだ。

今日もまるまると太った体を横たえて、生あくびを漏らしている。

宇佐美「シャノちゃん、お友達になろうにやー」

そのままシャノの近くにぬいぐるみを近づける。

目の前でぴょんぴょん跳ねさせて、そして……。

奇声とともに、鋭い猫パンチを食らっていた。

う だ ゃ だ や だ や だ や だ や だ や だ や つ !

何が気に入らないのか、ぬいぐるみに飛びかかってめちゃくちやにしている！

灰桜「シャノー！ 喰禪は駄目ですうううううううう

必死に止めに入る灰桜。

もちろん、排煙は止めどなく吹き上げていた。



月下「この天下御免の三日月傷、見忘れたとは言わせないであります」

……結局。

なにをどうやっても灰桜は煙を吹いてしまうので、



活動写真是諦めてもらうことになった。

月下「その方らの悪事、お月様はお見通しであります……」

でも、それでは灰桜が悲しそうだったので、ちょっとだけ雰囲気を味わつてもらうことにした。

舞台上では月下が小さな体をいっぱいに動かして、刀に見立てた箒を構えている。

月下「いざ、成敗であります！」

灰桜「いよっ！」

ぱちぱちぱち、と拍手。

灰桜「時代劇って、とっても面白いですねっ！」

宇佐美「結局、活動写真じやなくて単なる舞台になっちゃったけどね」

灰桜「ですが、とつても素敵です！」

宇佐美「じゃあ、まあ……いいか」

灰桜はびょんびょんと跳ねて、喜んでいるみたいだし。

月下「……どうして、自分が主演なのでありますよう

……約一名、不満があるみたいだけど。



異邦の給仕人形

執筆／丘野塔也

挿絵／まろやか



レーツェル「本日より、黒猫亭に戻りました」

スカートをそつと摘まんで、彼女はそれは優雅にお

辞儀をした。

レーツェル「レーツェルですの」

宇佐美「これはこれはご丁寧にどうも……」

立ち振る舞いがあまりに洗練されているものだか

ら、思わずペコペこと頭を下げてしまう。

宇佐美「えっと、宇佐美です……篠星さんの代理で、

いま厨房係を務めています」

レーツェル「よろしくご指導お願ひしますね、うささ

ん」

ちょっぴり悪戯っぽく微笑みを浮かべる。

宇佐美「そのあだ名、みんなから聞いたんですか？」

レーツェル「ええ、先ほど皆さまにも挨拶してきましたので」

言い出したのは灰桜だったろうか、いつの間にかう

ざさんで通っている。

足下でにやあと小さな鳴き声がする。

しなやかに体をくねらせて現れたのは、一匹の黒猫

だ。

レーツェル「シャノ、ただいま長旅から戻りましたの。……ちょっと太りました？」

ゴロゴロと喉を鳴らして、体を足に擦りつけている。

そんなシャノの頭を、白い指先で撫でていた。

宇佐美「レーツェルさんは、ローベリアに帰っていたんですよね」

レーツェル「ええ、わたくしはもともとローベリア製の

の人形ですので」

そう話す横顔には、確かに異国の雰囲気が感じられ

る。

レーツェル「大戦末期に作られた試作機らしいのです

が、どこをどう流れたのか東邦までやってきてしまい

まして。研究対象として敵国で目覚めたのですわ。本

当に哀れなこと」

宇佐美「ははは……でも、その時には戦争は終わって

いたんでしよう？」

レーツェル「ですが、人の意識というものはすぐには

変えられません。観察も兼ねて黒猫亭に預けられたも

のの、この見た目のせいでどれだけ奇異な瞳を向けられたことか」

宇佐美「……ローベリアとの交流が始まったのも最近のことですしね」

レーツエル「ええ、そのおかげで里帰りできたのですけど」

長年交戦状態にあつた皇国とローベリア。終戦してからもしばらくの間、この両国に国交は無く、自由な行き来は出来なかつた。それが緩和されたのはごく最近のこと。

宇佐美「やっぱり懐かしかつたですか？」

レーツエル「そんなわけありませんわ。こう見えて、わたくしは皇国生まれの皇國育ち」

宇佐美「言われてみれば……」

レーツエル「結局のところ、ローベリアもわたくしにとっては異国。居場所なんてどこにもないんですの……」

視線を落として、ひどく寂しそうな顔をする。

帰るべき場所がない。その気持ちはボクにも分かる気がした。戦争は大切なものをなにもかも奪っていく。

宇佐美「……あの」

だから、レーツエルさんの哀しみをどうにか共有で

きないかと言葉を選んだ。

宇佐美「レーツエルさんの居場所は、ここ黒猫亭ではないでしょうか？」

レーツエル「……うさん」

はつとなつた様子で、レーツエルさんは顔を上げる。

レーツエル「……わたしの居場所は黒猫亭……」

宇佐美「そう、そうですよ」

レーツエル「灰桜お姉様の……隣……」

宇佐美「うん？」

レーツエル「その、柔らかな腕の中……小さな体で

ぎゅっと抱きしめてくれる……そこが、わたくしの居場所……？」

宇佐美「レーツエルさん？」

宇佐美「レーツエルさん？」

ぼーっとなつて、どこか恍惚とした笑みを浮かべている。

レーツエル「灰桜お姉様は、唯一、わたくしに分け隔てなく接してくれた人……」

宇佐美「ま、まあ、灰桜はそういう性格ですからね」

レーツエル「わたくしの帰るべき場所……守るべき人ですの」

宇佐美「……守る？」

レーツエル「悪い虫が付かないように」

どこか謎めいた笑顔を浮かべる。

次の瞬間——

宇佐美「あれ？」

いない？

宇佐美「レーツエルさん？」

シャノだけを残して、忽然と消えてしまっていた。

いつたいどこに……。

レーツエル「うざさん」

宇佐美「ひつ!？」

氣づくと、レーツエルさんはすぐ隣にいた。

レーツエル「……灰桜お姉様にちょっかいをかけては

いないのでしょうね？」

耳元で囁くように、忠告めいた言葉を送り込んでくる。

カチヤリと金属音。

氣づくと、テーブルナイフをその指先に握っている

……。

宇佐美「仲良くはしていますよ……同僚、として」

レーツエル「ふうん……」

そっとボクから離れる。

ナイフはいつの間にか、忽然と消えていた。

レーツエル「では、黒猫亭のお仕事を……いいえ、お

姉様のお手伝いをしてきますわ」

再び優雅にお辞儀をして、マントをふわりと舞わせ

て去っていった。



厨房の入り口から、ちらちらとフロアを見つめてみ

る。

屋下がり、お客様はまばらな様子だが……。

鶴羽「灰桜、このお皿を戸棚に片付けてくれる？」

灰桜「りょーかいです！ よいしょ、よいしょ……」

山積みになつた平皿を片付けようとする灰桜。

しかし、その動きはどうにもぎこちない……。

灰桜「あああっ！」

案の定、足下をふらつかせている。

このままではお皿が崩れ落ちてしまう！

レーツエル「お姉様」

……と思つた瞬間、背後からふわりと体を抱き留める姿がある。

レーツエル「半分お持ちしますわ」

灰桜「みゅっ……ありがとうございます」

客足もすっかりすくなくなつた頃……。

篠星「こんにちはあ」

灰桜「篠星さん！ こんにちはです！」

ふらりと篠星さんがその姿を見せていた。

宇佐美「あれ、今日はお手伝いに来てくれる日ではなかつたような……」

篠星「頼まれものがあつたから寄つたんですよ。はい、これ」

それは、真つ赤な薔薇の花束だつた。

灰桜「わー、ありがとうございます！」

テーブルに飾り付けるのだろうか。

真紅の色合いは、黒猫亭の店内に映えそうだ。

篠星「灰ちゃん、薔薇には棘があるので気をつけてくださいねえ」

灰桜「みゅ？ わ、わっ……危ないです」

花束を受け取つたはいいものの、あわあわしている。

レーツエル「お姉様、お任せください」

すすす、と隣にやつてくるレーツエル。

レーツエル「……ふつ！」

煌めきと共に、なにやら一閃していた。

レーツエル「はい、これで心配ありませんわ」

灰桜「みゅみゅっ!? 棘がすっかり無くなつて、きれ

いになつています」

レーツエル「まあ、不思議ですの」

そう言いつつ、レーツエルさんはそつと後ろ手にテーブルナイフを隠していた。

午後の休憩時間中……。

月下「夜に備えて、軽く掃除するであります」

灰桜「はい！ わたしはモップがけをしますね」

モップを手に、きゅつきゅと床を磨いている灰桜。

しかし、そこはお酒が並んでいる棚の側で……。

灰桜「みゅっ！」

案の定、モップの柄が酒瓶にぶつかってしまう。

宇佐美「灰桜、危ない……！」

ふらりとバランスを崩した酒瓶が、彼女の頭の上に落ちそうになつて……！

レーツエル「…………しつ！」

次の瞬間、空中を何かが煌めいた。

灰桜「あ……あれ？」

レーツエル「お姉様、もう大丈夫ですわ」

頭上の酒瓶はどこへやら、ぱつと消えてしまつてい

た。

灰桜「ですが……」

レーツエル「ここは、わたくしがやつておきますので」  
にこりと微笑んでいる。

灰桜は気づいていないようだ。

レーツエルの投げたテーブルナイフが、酒瓶を捉え、

壁際に磔にしていることを……。



そう背後から声をかけられる。

灰桜「レーツエルさんっ！」

宇佐美「灰桜は、そう思つていなかもしれませんよ」

レーツエル「え……？」

レーツエル「お姉様……それに皆さまも」

そこには鶴羽、月下、それに簫星も揃つていた。

宇佐美「レーツエルさん、壁に穴を開けないでください……」

灰桜「改めて……お帰りなさい」

代表して、灰桜はその胸に薔薇の花束を抱いている。

レーツエル「仕方がありませんわ、お姉様の危機でしたもの」

結局、鶴羽さんに見つかって、叱られるハメになってしまった。

なぜかボクも巻き添えになつて、ナイフの穴を粘土で塞いでいた。

レーツエル「わたくしはローベリアに戻つて、そして気づきましたの。影からお姉様を手助けすることが自分の役目……存在意義……いえ運命だと……」

宇佐美「うーん……そうでしょうか？」

レーツエル「なにを言うんですの、真摯な気持ちですわ！」

宇佐美「灰桜は、そう思つていなかもしれませんよ」

レーツエル「え……？」

レーツエル「お姉様……それに皆さまも」

そこには鶴羽、月下、それに簫星も揃つていた。

灰桜「改めて……お帰りなさい」

代表して、灰桜はその胸に薔薇の花束を抱いている。



そつと、レーツエルに差し出していた。

レーツエル「この花……わたくしに？」

簫星「ええ、帰国のお祝いに」

月下「無事がなによりであります」

鴉羽「また、一緒に働きましょ」

レーツエル「お姉様……皆さま……」

そつと花束を抱くレーツエル。

ぽろぽろと涙をこぼして、嬉しく泣いていた。



満月の夜

執筆／丘野塔也

挿絵／まろやか



初夏の夜空は少し湿っぽく、星はわずかに滲んでいた。

昨日降った雨のせいで、石畳の端々には水たまりが

残っている。街灯のフィラメント電球の頬りなげな灯りと、空にぽっかり浮かんだ月を反射させていた。

まるで盆のような満月だった。赤みがかった大きな

月明かりが、黒猫亭を煌々と照らし出していた。

月下「……」

月下「シヤノ、お前も眠れないでありますか？」

月下は、出窓の屋上に腰かけていた。真夜中の来客は、黒猫亭の飼い猫シヤノだ。まるまると太った体を

揺らして、頬をすり寄せてくる。

月下「……何者でありますか？」

抱き上げたところで、ふと顔を上げる。

月明かりがこれほど明るくなれば、見逃していたかもしねれない。

レーツエル「失敬、お邪魔をするつもりはありませんの」

ふわりとマントを揺らして、物陰からレーツエルが現れた。

レーツエル「シヤノが屋上に出たがっていたのですが、あいにく天窓が閉じておりましたので」

月下「……」

月下は視線を逸らして、そっとシヤノの頭を撫でる。ごろりと喉を震わせるのが分かった。

レーツエル「お隣、よろしいかしら？」

特に気にする様子もなく、そつと音もなく天窓の上までやってくる。

月下「好きにするであります」

スカートをちょこんと摘んで、その隣に腰を下ろした。

レーツエル「不思議な月ですわねえ」

月下「夏至の時期の満月は、赤く染まるのであります」

レーツエル「お詳しいですね」

月下「夜間偵察を任務としておりましたので」

レーツエル「そうそう、それをお伺いしたかったんですけどの」

つれない対応だが、レーツエルは一切気にしていない様子で声を弾ませた。

レーツエル「わたくしを月まで連れて行ってくれませ



んか?」

月下「は?」

レーツエル「月下さんは飛べるではありませんか。一度体験してみたいんですの。夜空を高く飛んで、あの月まで……」

月下「高度6000mが限界なので」

シヤノを抱いて、月下はそそくさとその場を去ろうとする。

レーツエル「待つてくださいませ、月までというのは例えですわ」

月下「今日はもう休むであります」

レーツエル「ちょっとだけ、夜空を飛んでみたいんですの。灰桜お姉様が体験したように……」

月下「お断りであります」

猫撫で声で懇願されるが、月下はあくまで強情だった。

月下「…………?」

レーツエル「あら?」

ふっと、月下が顔を上げると、レーツエルが声を上げるのは同時だった。

月下「街が騒がしいであります」

レーツエル「この音は、警察隊の自動二輪ですわね」

月下「……詳しいでありますね」

レーツエル「皇国製エンジンの音については、だいたい把握しておりますの」

月下「事件でありますか？」

レーツエル「……狼男かもしませんの」

赤い月を見つめて、ぽつりとつぶやく。

月下「狼……男？」

レーツエル「わたくしの生まれ故郷、ローベリアでは

知られた話ですわ。こんな満月の日、半獸半人の怪物

が現れるんですの」

月下「それは、どのような姿なのでありますか？」

レーツエル「全身毛むくじやら、手には鋭い爪が光り、

その顔は狼そのもの……」

月下「お、狼……」

月下の額に、つづ……と汗のように冷却液が垂れる。

レーツエル「そういういえば、犬の先祖は狼ですわね」

月下「な、なぜそれを言うのでありますか！」

レーツエル「なんとなく思いつきまして。ところで

……」

月下「……なんであります」

レーツエル「月下さんは、犬が嫌いとお伺いしましたが」

月下「月下は戦闘人形であります。犬が嫌いなどありえないのであります」

レーツエル「では……狼男退治といきますか？」

月下「……え？」

レーツエル「本当に狼男だったら、警官隊では歯が立ちませんわ。戦闘人形であるわたくしと、月下さんの出番……違いますこと？」

月下「な、な……」

レーツエル「月下さんの飛行能力ならひとつ飛び。ひとりで十分……と言うのなら、それでもいいのですけれど」

月下「……シャノ」  
きゅっと唇を結んで、黒猫を天井に下ろす。

月下「危ないので、中で待っているのであります」

レーツエル「では……」

月下「念のため！」

がば、と顔を上げて、月下は珍しく声を荒げた。

月下「レーツエルを連れて行くであります」

レーツエル「そう来ませんと♪」

ご機嫌なレーツエル。そのまま、そそくさと月下の

背後に回る。

レーツエル「しつかり拘まっていますわ」

月下「意外と重いであります」

レーツエル「レディに失礼ですの……きやああああっ!?」

たつと足を蹴り出して、ふたりは宙に舞う。

レーツエル「あ、あ……わ、わああああああ！」

……!？」

驚いているやら興奮しているやら、そんなレーツエ

ルの声が響いていた。



につこりと笑うレーツエル。

月下「開店準備、急ぐであります」

ぷいと小さな背中を向けて、ひとり仕事に励んでい

美は声を上げた。

宇佐美「窃盗団の大捕物があつたんだって」

ふたりして新聞に見入っていると、その背後をレー

ツエルが通りがかつた。

レーツエル「もしかすると……狼男の仕業かもしれま

せんね」

灰桜「狼男？」

レーツエル「満月の夜に現れる、全身毛むくじやら、

半獣半人の怪物で……」

灰桜「みゅ、怖いですっ」

月下「迷信であります」

怯えている灰桜を、月下がため息混じりに諫める。

月下「この目で確かめましたので」

宇佐美「え？」

レーツエル「……ふふ」

月下一瞬、急いでいる。

灰桜「うさん、どうしたんですか？」

朝の開店準備の時間。新聞をちらりと眺めて、宇佐

翌日――

宇佐美「物騒だなあ」

灰桜「うさん、どうしたんですか？」



夏の呼び声

執筆／魁

挿絵／まろやか



夏の訪れを感じさせるまぶしい太陽。

否応なしに上がる気温に、ボクの足取りは重い。

両手で持っている大きな紙袋は、腕に浮いた汗を吸つてところどころ色が変わっている。

灰桜「うざさん、荷物はわたしが持ちますよ」

そう言つてきたのは、隣を歩くボク以上に大きな紙袋を抱えた灰桜。

宇佐美「灰桜はもう十分持つてるじゃないか。このくらいボクでも平気だよ。それにも暑いねー」

灰桜「はい。わたしも冷却水の放出が止まりません」

宇佐美「セミが鳴き始めたら、もつと暑くなるよ」

灰桜「みゅ！ セミが気温を上げるんですか？」

宇佐美「ははは、そういうわけじゃないんだけどね。セミの鳴き声を聞くと、どうしてか夏の暑さをより強く感じてしまうんだよ」

灰桜「そうなんですか。不思議ですね」

口を開けたまま、感心したように空を見上げる。

宇佐美「あれ？」

灰桜「みゅ？ どうかしましたか？」

宇佐美「黒猫亭の前に、自動車が停まってる。あんな

のに乗つてくるお客様は珍しいね」

少し形は古いけど、黒い外装はしっかりと磨かれているのか、太陽をまぶしくらい反射させていた。



宇佐美「ただいま戻りました」

灰桜「ただいまです」

黒猫亭のドアをくぐると、

月下「おかえりなさいであります」

レーツエル「外は暑かつたでしきう。冷たいピーナツ

ツバターシェイクを準備して参りますわ。あと……う

さんも何かありますか？」

宇佐美「じやあ、アイスティーを……」

ツンと顔を背ける。

レーツエル「冷蔵庫に入つてますわ」

宇佐美「…………」

レーツエルさんは灰桜の持つていた紙袋を抱えて、

厨房に消えて行く。

灰桜「みゅ～？ みゅみゅ？」

ふと見ると、灰桜は不思議そうに店内を見回しながら首を傾げている。

宇佐美「灰桜、どうしたの？」

灰桜「いえ、お客様がいらっしゃらないようですが、だとするとお店の前の自動車はどちらの方の物でしょうか？」

鴉羽「あれは黒猫亭の新しい備品よ」

鴉羽さんが控え室から出てくる。

鴉羽「オーナーのツテで、軍の放出品を格安で譲つてもらったのよ」

その声は、どこか弾んでいる。

まるで玩具を入れて、興奮を抑えきれない子供のような声だ。

鴉羽「買い物も楽になるし、送迎もできるようになるわ。黒猫亭の頼もしい助つ人よ」

宇佐美「へえー、確かに便利になりますね。でも、運転は……」

月下「自分は足が届かないであります」

灰桜「練習すればできるでしようか？」

鴉羽「ふふ、そこはあたしに任せなさい。こう見えて

昔は自動車も自動二輪車も手足の様に扱っていたのよ。大切な人を助けるために敵陣に乗り込んだり、山道を駆けたり、銃弾をかわしたり……ふふ。懐かしいわね」

灰桜「そうだつたんですか！　さすが鴉羽さんです」

宇佐美「戦時中のことですか……？」

鴉羽「そんなに古い話じゃないけどね」

宇佐美「ええ……、逆に物騒なんですけど……」

レーツエル「あのー」

厨房から顔だけを覗かせたレーツエルさんが声をかけてきた。

レーツエル「盛り上がっているところ申し訳ないのですが、先程の買い物、卵を買い忘れているようですわ」

灰桜「みゅ！　す、すみません！」

レーツエル「い、いえ！　お姉様を責めているわけではありません。うさんかだらしないだけですわ！」

宇佐美「ボクですか？」

理不尽な叱られ方な気もしたけど、買い忘れていたのは間違いない。

鴉羽「まつたく……」

追い打ちで鴉羽さんからも注意される……。

そう思い、ボクも灰桜もしゅんとなる。

鴉羽「しようがないわねー、早速自動車の出番ね」

予想外に朗らかな声。

レーツエル「どんだけ自動車に乗りたいんですの

……」

鴉羽「うさんと灰桜も一緒にどう？ 市場まであつ  
という間よ」

灰桜「いいんですか？ 是非乗せて下さい！」

宇佐美「……なんだろう、嫌な予感がする……」



ボクは後ろの座席に、灰桜は助手席に乗る。  
しっかりと整備と掃除をしてから引き渡されたのだ

ろうか、車内には新しい油の匂いが残っていた。

座面のシートも張り直してくれたんだろう、まだ固  
さが残っている。

灰桜「わっ、わー、震えます、自動車が震えます

よ！」

鴉羽「感じるわね、この子の鼓動を……」

宇佐美（何か言い出した！）

鴉羽「じやあ、ちょっとお店頼むわね」

見送りのために、月下とレーツエルさんが店の外ま  
で出てきてくれていた。

月下「了解であります。お気をつけて」

月下は鴉羽さんにそう言つたあと、ボクの方に向き  
直る。

月下「お気をつけて」

宇佐美「どうして改めて言つたの？ もう嫌な予感し  
かしないよ！」

鴉羽「それじゃ行くわよ。出発」

灰桜「出発しまーす」

レーツエル「お姉様ー」、レーツエルはお姉様の帰りを  
待つてますわー」

レーツエルさんのよく分からぬ別れの寸劇を尻目  
に、自動車はゆっくりと走り出す。

ボクは座席の上で、ぎゅっと体を固くしていた。

灰桜「すごいです、動いてます！ 鴉羽さんの運転で  
自動車が走つてます！」

鴉羽「運転なんてそう難しいものじゃないわ。灰桜にも今度教えてあげるわね」

灰桜「ぜひお願ひします。自動車が運転できるようになれば、わたし、もつと皆さんのお役に立てます！」

自動車はボクの想像とは違い、安全な速度で大通りを走っていた。

鴉羽「どうしたの、うさん」

宇佐美「いえ、その……乱暴な運転をするんじゃないかなって思い込んでまして……ごめんなさい」

鴉羽「あなた……いつたいあたしのことを何だと思つて……」

宇佐美「だって、敵陣に乗り込んだり、山道を走つたり、銃で撃たれたって言つてたから」

それにこうやつて走つている今、鴉羽さんの体からは力が抜けていない。

肩肘が張つていて、何かがあつても堪えられる姿勢で運転していた。

だからこちらもつい身構えてしまう。

鴉羽「ええ、そうね。そういうこともあつたわ」

鴉羽さんは真っ直ぐ前を見ながら、少し懐かしむよ



うに苦笑する。

鴉羽「でも、今はもう、そんな運転をする必要はないのよ」

そう言つて、隣の灰桜を見た。

灰桜「わー！ わーー！ すごいです！ 景色が見たことない速さで動きます！」

鴉羽「昔は色々な事があつたけど、こうして今はゆつくりと走ることができるわ」

そう言いながら顔を前に向け直す。

後部座席に座っているボクには、鴉羽さんの表情は見えない。

鴉羽「折角だから、少し遠回りをして行きましょう」

灰桜「いいんですか？ 皆さんがお店で待つていると思うんですが？」

鴉羽「この自動車がどれくらい走れるかを確認するのも、大切な仕事よ」

でも、微笑んでいるような気がした。

灰桜「あ……、うさん！ 鴉羽さん！ セミが鳴いています！ 聞こえました！」

宇佐美「え？ ああ、本當だ、ちょっとせつかちなセ

ミがいるみたいだね」

自動車のエンジン音の合間を縫うように聞こえてくるセミの鳴き声。

鴉羽「夏が来るわね。夏のメニューの準備をしましょう」

宇佐美・灰桜「はい！」

鴉羽さんの弾んだ声に、ボクと灰桜は元気よく頷いた。



夏の花火

執筆／丘野塔也

挿絵／まろやか



夏の夕日が、少しづつ夜に溶け出していく。

窓辺からこうして暮れなずむ空を見上げるのは、いつだって特別な時間だ。休憩時間挟んで、夜の営業が始まる隙間時間。黒猫亭を包んでいるのは東の間の静寂だ。その静けさも直に破られて、フィラメントの明かりが店内を照らすと、来店客が賑わいを見せるこ

とだろう。

月下「今日はもう閉店であります」

厨房に来た月下が、そう短く告げた。

丁寧にお皿を並べていた灰桜が、ぴたりと手を止め  
る。

灰桜「はえ……？」

月下「もう店じまいであります」  
表情を変えずに、再びそう告げる。

月下「どうせもう、お客さんは来ないでありますから」

灰桜「そそそ、それはもしかしてえつ!?」

情けない声を上げて、灰桜は月下にすがりついていた。

灰桜「黒猫亭、閉店の危機ということでしょうか?!? わた、わたしが原因ですか⁈」

宇佐美「灰桜、ちょっとと落ち着いて」

灰桜「今日一日は大きな間違いもなくつ……あああ、  
そういうえば、檸檬ソーダをメロンソーダと言いや間違え  
てしまい、笑われてしましましたが、まさかそのせい  
でしょーか⁈」

ひとりわたわたして、慌てている。

宇佐美「大丈夫、大丈夫。そつか、今日は……」

カレンダーを確認すると、そこには大きな星印。

灰桜「みゆ？」

すっかり忘れていたけれど、今夜は特別な日だ。

竈星「こんばんはあ」

ドアベルが鳴ると、のんびりした声が響く。

灰桜「竈星さんですっ」

みんなで厨房を出て、出迎えに行く。

竈星「ごめんなさいね、すっかり遅くなつて。じゃあ

灰ちゃん、早速行きましょうか？」

灰桜「わたし……ですか？」

鴉羽「今日は星祭りの日よ」

奥から顔を見せた鴉羽さんが、改めてそう説明してくれる。

鴉羽「前から行きたいって言つてたじゃない。だから  
箬星に案内を頼んだの」

灰桜「……ああ！」

やつと合点がいったようで、ぽんと手を突いていた。

灰桜「そうですか、今日がお祭りの日なんですね！」

箬星「ええ、一年に一度。男星と女星が巡り逢う日な

んですよ！」

月下「みんなお祭りを見に行つてしまふので、お店を開けてもしようがないのであります」

灰桜「そうでしたか！ 閉店してしまふのではなくて  
よかつたです」

鴉羽「閉店？」

宇佐美「まあ、それは単なる勘違いというか」

灰桜「ですが、皆さんはお祭りを見に行かないの  
しょーか？」

鴉羽「私たちはお仕事があるからね。レーツエル、準  
備は出来てる？」

レーツエル「はあ……わたしもお姉様と一緒に、星祭  
りに行きたかったのです」

あからさまにやる気の無いレーツエルが、風呂敷を

背負つてとぼとぼ歩いてきた。

鴉羽「オーナーが屋台の許可を取つてくれたの。だか  
ら出店を出すのよ」

灰桜「素敵です！ なにを出すのですか？」

宇佐美「ボールカステラだよ。こう、甘い生地をまる  
く焼き上げるんだ。とってもおいしいよ」

鴉羽「本場・西邦カステラとして売り出す予定よ。こ  
れで今月の売上を賄うわ。レーツエル、しつかり客引  
きをお願いね」

レーツエル「若干誇大広告な気はしますけれど」

ぶつぶつ言いながら、車に荷物を運んでいる。

灰桜「お手伝いしなくていいのでしょうか？」

鴉羽「屋台は小さいから、三人いれば十分よ」

レーツエル「わたくしもお姉様と一緒に、女星と女星  
を巡り逢わせたいですわ……」

ぱちりと片目をつぶる鴉羽さん。  
遠くからは少し恨めしい声が聞こえてきていた。

箬星「げっちゃんも一緒に行きます？」

月下「人ごみは嫌いなので。自分は屋上から見るであ  
ります」



灰桜「では、わたしたちもそこに……？」  
篠星「灰ちゃんは私と一緒に、もっと近くで見ましょ  
うかっ」

◇◆◇

篠星「七月は稲の開花時期でもあります。男星と女星  
が巡り逢うという浪漫ある伝承と、豊穣のお祝いが一  
緒になつて星祭りが始まつたんですねえー」

灰桜「はー……」

篠星と灰桜、ふたりの姿は石橋の上にある。

そつと欄干に体を預けながら、夜空を見上げていた。  
辺りを行き交うのは浴衣を着た人々の姿。少し遠く  
では屋台の灯りが煌々と輝き、軽快な祭り囃子が聞こ  
えてくる。

灰桜「ですが、篠星さんつ。男星と女星はいつになつ  
たら出会えるのでしょうか？ 先程からぴくりともせ  
ず……」

灰桜の視界。空を横切る天の川の両端に、星が輝い  
ているものの、当然ながら動くことはない。

簞星「まあ、それは言い伝えですので」

灰桜「なんだか、寂しいですねえ……」

簞星「そういうときは、ほら……」

足下の小川を指差す。そこには月と共に、微かな星  
明かりが反射している。

簞星「えいっ」

小さな小石を投げ入れると、静かな水面が揺れる。

灰桜「混ざり合いました」

すると、男星と女星、それに夜空が水の中で溶けて

ひとつになつていた。

簞星「昔から、こうやつて出会いを手助けしていたそ  
うですよ」

灰桜「な、なるほどー……みゅみゅつ!!」

じつと見つめている水面に、ぱあっと大輪の花が咲  
く。

灰桜「出会いのお祝いですかっ!?」  
簞星「花火の時間ですよ。ほらっ」  
灰桜「わあああ……」

夜空にしゆるしゆると昇った花火が、色とりどりの  
輝きを見せる。

少し遅れて、炸裂音。

灰桜「…………」

簞星「灰ちゃんは、花火を見るのは初めてですか？」

灰桜「…………みゅみゅ…………」

簞星「分からぬ…………？」

灰桜「はい……とつても素敵で、見たことあるような、  
無いような……」

簞星「いつか巡り逢えるかもしませんね、灰ちゃん  
の思い出と」

灰桜「はい……」

簞星「花火が終わったら、屋台を見に行つて……ボ  
ルカステラを食べに行きましょう。これ、私から」

灰桜「お小遣いです」

簞星「からちやんには、内緒ですよー」

にっこりと笑う簞星。

ぎゅっと硬貨を握りしめて、灰桜は飽きることなく  
花火を見つめていた。



日記の書き方

執筆／魁

挿絵／まろやか



暑の暑さをほのかに残した風が吹く初秋の夜。黒猫亭のフロアはしんと静まりかえっていた。

太陽のようなまぶしさと賑やかさで埋められていた営業時間が、まるで夢現のように思えてしまう。

そんな静寂の中に、ちいさな足音が近づいてくる。

灰桜「うみゅー、万年筆をどこにやつてしまつたんでしようか。閉店までは注文取りに使つていたのですが……」

窓から差し込む僅かな月明かりを頼りに、忘れ物を探していた。

両手を前に伸ばしながら、文字通り手探り。

おぼつかない足取りのせいで、ゴツンと椅子を蹴ってしまう。

灰桜「す、すみません！　おけがはありませんか!?」

反射的に頭を下げて謝る灰桜。もちろん返事なんてない。

灰桜「うみゅ？」

姿勢を戻した灰桜の視線の先、テーブルの上に探していた万年筆があつた。

灰桜「ああーーー！　ありました！」

思わず歓喜の声を上げてしまうけど、慌てて自分の口を手で押さえる。

口を押さえたまま、キヨロキヨロと周囲を見回す。自分の声で誰かを起こしてしまつていなか心配したようだ。

灰桜「ふー……夜に大きな声は迷惑ですから、気を付けてないといけないですわ」

ほっと胸をなで下ろしながら、テーブルの上の万年筆に手を伸ばす。

灰桜「うみゅ？」

テーブルの上には、万年筆と一緒に一冊の本が置かれていた。

革製のカバーで包まれている。表紙には型押しで何か文字が書かれているようだけど、薄暗くて読めない。

灰桜「誰かの忘れ物でしようか」

本を手に取ると、灰桜はおもむろに頁を開き、薄暗さに負けないよう目をこらす。

灰桜「……こ、これは！」

灰桜の目が大きく見開かれた瞬間、パチッとフロアの電気が点いた。

同時に、灰桜は自分の背後に立つ「誰か」の気配に気づく。

鴉羽「は～い～ざ～く～ら～……」

灰桜「か、からすば……しやん……」

その声だけで理解する。自分は何か鴉羽にとつていけないことをしてしまったのだと。

鴉羽「……それ、読んだ？」

灰桜「いえ……その……は、はい……」

鴉羽「……」

灰桜の返事に、鴉羽は何も答えない。だけど、灰桜はそれは叱られる予兆だと知っている。

灰桜「と、とても素敵な詩だと思います！ この両手が翼なら世界の果てでも飛んで行くのにとか、乾いた心はたった一滴の零で満たされるとか」

鴉羽「思つてた以上にしっかり見てるじゃない！」

灰桜「からひゆばひやん～、ひやめてくらはあい～」

兩類をむにむにと引っ張られて、灰桜は涙目になる。

灰桜「ひよ、ひようれふ！ この詩でうひやをつくりまひよう！」

鴉羽「それは詩じやなくて日記よ！」

灰桜「うみゅ？」

◇◆◇

翌日、鴉羽は不機嫌だつた。

灰桜「あのー鴉羽さん……」

鴉羽「きつ！」

灰桜「うみゅ～……」

灰桜が話しかけようとしても、威嚇されるばかり。

月下「気にならないでいいであります、灰桜」

灰桜「でも～……」

月下「鴉羽は怒つているのではなく、ただ恥ずかしがつてているだけであります」

鴉羽「げ、げげ、月下ーーー！」

灰桜「うみゅ？」

レーツエル「そうですわ、お姉様。鴉羽さんは日記という乙女心を見られて気持ちに余裕がないだけですのよ

鴉羽「レーツエルーーー！」

月下とレーツエルに自分の胸の内を当てられ、鴉羽

は涙目になりながら顔を真っ赤にさせた。

灰桜「日記は人に見られると恥ずかしいものなのでしょうか？」

心底不思議そうな顔で首を傾げる。

宇佐美「たぶん、それは人によるんじゃないかな」

はは、と困ったような笑みを浮かべて宇佐美が手をタオルで拭きながら厨房から出てくる。

宇佐美「日記はその日にあつたことを書くだけじゃなくて、その日に感じたことや思ったこと、言えなかつたことを書いたりもするんだよ」

灰桜「それはとても素敵なことです！ だって、読み返したときに何があつたかだけじゃなくて一緒に気持ちも思い出せるということです！」

宇佐美「うん、そうだね。だけど、人には見られたくない出来事、内緒にしたい気持ちも書いてることだつてあるんだ」

灰桜「あ……それは誰にも見られたくないですね……」

灰桜は申し訳なさそうに鴉羽を見た。

鴉羽「別に誰かに言いふらしたりしなければいいわよ」

少し拗ねたように言う鴉羽に灰桜は慌てて駆け寄る。

灰桜「大丈夫です！ 絶対に内緒にします！ この両手が翼なら世界の果てでも飛んで行くのにとか、乾いた心はたつた一滴の零で満たされるとか、あんなに素敵な言葉はわたしの胸の中に大事にしまっておきます！」

胸の前でぐつと拳を握りしめながら、信じてくださりとばかりに目をキラキラさせる灰桜。

月下はほう、と感心したように、レーツエルはあらあら、と頬を緩ませ、宇佐美はあちゃー、と額に手をやる。

そして、鴉羽は引きつった笑みを浮かべながら、再び顔を真っ赤にさせ——

鴉羽「はいざくらーー!!」  
黒猫亭に怒号が響いた。



灰桜「……ということが、ありました」

頬を両手でさすりながら、町を歩く灰桜。

その隣には、篝星がたおやかな笑みを浮かべながら歩いていた。

篝星「からちやんも相変わらずですねー」

灰桜「篝星さんも、日記をつけていますか?」

篝星「はい。つけていますよ。もう何年もずっと。本棚にずらーっと並ぶくらいです」

灰桜「それは凄いです!」

篝星「日記は……自分の思いをいつまでも残すことができるんです」

灰桜「はい、それがとても素敵なことだと思います」

篝星「あっ、灰ちゃん。少し待ってくださいね」  
何かを見つけたらしく、篝星が道の脇にあつたお店に入つっていく。

そしてほどなくして戻つてくる。

篝星「これを受け取つてください」

そういつて差し出してきたのは一冊の日記帳。

灰桜「これをわたしにですか?」

篝星「灰ちゃんも、日記を書いてみるのはどうですか? きつと毎日が楽しくなりますよ」



灰桜は差し出された日記帳を、まるで宝物を見るような目をしながら両手で受け取る。

そして大事に胸に抱きしめる。

灰桜「ありがとうございます！　あの、日記ってどうやつて書き出せばいいのでしょうか？」

篝星「そうですねえー」

篝星は少し考えてから、やつぱりにこりと笑つて言つた。

篝星「まず自分の気持ちを書くといいでですよ」



歌  
と  
踊  
れ  
ば

執筆／丘野塔也

挿絵／まろやか



レーツエルは格子窓に手をかけて、ほんの小さく開けた。湿気をはらんだ厨房の空気に、ふわりと冷ややかな風が紛れ込む。残暑の終わりを告げるかのようだつた。

レーツエル「やつぱり」

小さな手を軒先に差し伸べ、納得した声を上げている。

レーツエル「降つてきましたわ」

宇佐美「秋雨だね。どうりで涼しいと思った」

下揃えの手を止めて、外を見上げる。日暮れ時の空は、どんよりとした鉛色の雲に覆われている。朝から冴えない天気だつたけれど、ついに崩れてきたらしい。灰桜「みゅうう……雨だとお客様の入りが悪くなりますねえ」

ボクの後ろで、お皿を洗つていた灰桜。布巾で水気を切つて、レーツエルの背中から空模様を眺めている。宇佐美「今夜は暇かもしれないね」

レーツエル「仕方がないので、一緒に歌でもうたいいましょうか?」

灰桜「歌、ですか?」

レーツエル「止まぬ長雨に♪ 溶けていく街♪  
マントを可憐に舞わせて、くるりと一回転して歌声を響かせる。」

レーツエル「さあ、お姉様も一緒に」

灰桜「みゅみゅみゅ、わたしはうたえなくて♪」

レーツエル「そんなの気にしませんわ。一緒に声を上げましょう」

灰桜「で、ではっ……」

意を決した様子で、小さな手をぎゅっと握りしめる。

レーツエル「セーの♪」

灰桜「や、ま、ぬ、な、が、あ、め、に、」

普段の可愛らしい声とは似ても似つかぬ濁声。

まるで地獄の底から響くような叫聲が響いていた。

灰桜「みゅみゅつ、空が泣いています♪」

レーツエル「土砂降りですわね。台風でも来たのでしようか?」

灰桜「ぐしゅつ……ばたしの歌が拒絶されているんで

すっ!」

目をすっかり潤ませて、おいおい泣いている灰桜。

宇佐美「でも……」

ちらりとレーツエルを見つめる。

小さく頷く。彼女も同じように感じたようだ。

宇佐美「ちょっとうたえてなかつた？」

灰桜「みゅ！」

レーツエル「ええ、お姉様、とても前衛的で素敵なお歌

でしたわ！」

灰桜「みゅみゅ！」

確かにすごい声だったけど、でも以前聴いた時よりも【歌】になっていたような、そんな気がする。

灰桜「ほ、本当でしようか……？」

レーツエル「お姉様、リズムを取つてみればいかがですか？」

灰桜「リズム、というと……」

レーツエル「ほら、こうやって。いち、にー、さん、し」

手を鳴らして、四拍子のリズムを取り始める。

灰桜「こうでしようか？ いち、にー、さん、し

……」

レーツエル「頭のリズムをもつと意識したほうがいい

ですわ」

なんとかついていこうとするが、どうにも乱れがちだ。

宇佐美「灰桜、ちょっとといい？」

後ろに回ると、そつとその手を取る。ちょうど小さな体を、後ろから抱きしめるような格好だ。

宇佐美「いち、にー、さん、し」

灰桜「な、なるほど……」

レーツエル「うざさん！ 灰桜お姉様に、そんな、手

取り足取り……」

宇佐美「一番分かりやすいかと思つて」

レーツエル「そう言ひながら柔らかな髪の香りを堪能

しているのですね！ 許せませんわ！」

しゅるつとボクと灰桜の間に入つてくる。

レーツエル「こほん……代わつてわたくしが手取り足

取り教えて差し上げます」

灰桜「は、はい……よろしくお願ひします」

ぎこちないながらも、再び手拍子をしている。

こういうとき、灰桜は一生懸命物事を憶えようとす  
る。その無垢さがなんだか微笑ましい。

レーツエル「……ふんふん……さくらの香り……」

教師役は、若干不純な動機が混じっているけれど。

鴉羽「ちょっと、注文入っているわよ」  
ブーツの音が響いたかと思うと、鴉羽さんが顔を覗かせる。

宇佐美「あっ……す、すみません」

鴉羽「うさん……レーツエル、それに灰桜。なに油を売つているの？」

レーツエル「いえ、これは新しい給仕のパフォーマンスですわ」

止めておけばいいのに、レーツエルはなにやら抗弁する。

灰桜「……レーツエルさん、ここは素直に謝ったほうが……」

レーツエル「……大丈夫ですか、わたくしにお任せください……」

くつつき合つたままの状態で、ごよごよ話をしている。

レーツエル「皇国には二人羽織という文化がありますわ。そこで、お姉様の可愛さを前面に出し、給仕についてはわたくしが背後からサポートするという格好で

すの」

鴉羽「ふーん……じゃあ、やってみてちょうどいい。レモンスピリッツアーヒとつね」

レーツエル「お安い御用ですか、まずはこちらのワインを用意して……」

灰桜「みゅみゅみゅ！ ボトルをくるくるすると危ないですか？」

レーツエル「続いてレモンを絞る！」

宇佐美「うぎやつ！ 目に入つた！」

灰桜「変なところ触らないでください！」

レーツエル「お姉様！ 大人しくしておいてくださいませ!!」

鴉羽「……」

宇佐美「……はつ」

涙を拭つてみると、そこには静かな怒りに震える鴉羽さんの顔。

鴉羽「レーツエル……うさん……それに……はーいーざーくーらー！」

◇◆◇

鴉羽さんがやつてきた……と思ひきや、顔を出したのは簞星さんだ。

灰桜「うみゅみゅ、怒られてしましましたあ……」

閉店後。

鴉羽さんから言いつけられて、居残りで厨房を清掃していた。

レーツエル「お姉様は悪くありませんわ、責任はすべてこのレーツエルとうさんになりますの」

宇佐美「ボクも？」

レーツエル「スキンシップが過度なので、つい妬いてしまつたのですわ」

宇佐美「そ、そう……まあ、ちゃんと止めるべきだったけどさ」

灰桜「で、ですが、そのつ」

モップを握りながら、灰桜が声を上げる。

灰桜「おふたりのおかげで、少し練習ができました！  
それはとつても……嬉しかったですっ」

少し照れくさそうに、そう笑つてくれていた。

簞星「お掃除、終わりましたかあー？」

灰桜「は、はいっ！ 完璧ですっ！」

月下「レコードの準備、できたであります」

蓄音機の前には、小柄な姿がある。

レーツエル「いつたい、なんですか？」

簞星「からちやんから連絡があつて。灰桜たちにダンスを教えて欲しいって」

宇佐美「ダンス？」

簞星「リズムを取る練習をしていたそうじやないですか。だつたらダンスがいいんじゃないかって」

灰桜「鴉羽さんがそう勧めてくれたんですか？」

簞星「自分で教えればって言つたんですけど、ちょつと照れくさいみたいですねえー」

フロアの入り口をちらりと見つめる。

帳面を確認している鴉羽さん。視線が合うと、頬を



染めて、すぐに視線を落としていた。

月下「針を落とすであります」

レコードが廻り始めると、ゆつたりとした歌が響いていく。

簫星「じゃあ、灰ちゃんの相手役は……」

レーツエル「はいはい！ わたくしにお任せくださいな！」

簫星「じゃあふたり、よろしくお願ひしますねえ」

灰桜とレーツエルは壇上に上がって、そつと手を取り合う。

レーツエル「お姉様とダンス……夢のようですわ」

灰桜「い、一生懸命頑張ります！……」

簫星「じゃあ、ステップ確認しますよお」

ぎこちないながらも、ダンスを踊つていくふたり。

鴉羽「……うさんも」

気がつくと、隣に鴉羽さんが立っていた。

鴉羽「あとで、灰桜と踊る？」

宇佐美「ボクは大丈夫ですよ、また今度で」

鴉羽「そう？」

宇佐美「いつかきっと、また歌えるようになります」

歌と踊れば

鶴羽「……そう、ね」

桜。 楽しげに、レコードに合わせて体を舞わせている灰

そんな姿を見つめていると、そう信じることが出来た。



B A R 黒猫亭へようこそ

執筆／丘野塔也

挿絵／浅見百合子



月下「雨がぱらついてきたであります」

少し背伸びをして、ガラス窓越しに夜空を見上げて  
いる小さな姿。

僅かに窓を開けると、小さな手を軒先に差し伸べた。  
まるで春の名残のような風が吹き込んでくる。湿った  
土を思わせる香り。生ぬるさの中に、いまにも壊れて  
しまいそうな冷たさが閉じ込められている。

簞星「五月晴れもここまでですかねえ」

記帳の手を止めて、小さなため息をついた。  
簞星「今夜は、お客様はもう来ないかもしません  
ねえ」

月下「かえって好都合であります」

窓を静かに閉めて、月下がカウンターテーブルへと  
戻ってくる。

月下「今夜はふたりしか勤務しておりませんので」

簞星「忙しくなつてくれたほうが、お店としては嬉し  
いんですけど」

苦笑する簞星。

灰桜、鶴羽、レーツエル、それに宇佐見。メンテナ

ンスや用事、休暇が重なつて、今夜店を切り盛りする

のはふたりだけだった。

それで回ってしまうのも少し物寂しい。

簞星「まあでも、ゆっくり今後の準備ができるので、  
それはそれでいいかもしませんね」

気を取り直して、記帳を再開する簞星。

ノートと万年筆を手に、お酒のラベルを確認しながら、銘柄を記している。

月下「在庫のチェックは、月末のはずでありますが」  
そんな様子を見つめながら、ぱつりと疑問を口にしている。

簞星「ああ、これは違うんですよ。お酒の種類を覚えて  
いるんです」

月下「ラベルを見れば一目瞭然であります」

簞星「そうなんんですけど、ちゃんと記憶しておきたい  
と言いますか……」

月下「……？」

なんとも要領を得ない様子で、小首を傾げている。

簞星「先日、こんな本を入手しましてっ」

そんな月下に向かって、カウンターテーブルの棚から、一冊の本を取り出して見せる。

等星「『コックテールのいろは』という本です」

丁寧に装丁された、大判の本を取り出している。表紙は簡素で、いかにも専門書という風格が漂っている。  
月下「コックテール……コックピットの親戚ですか？」

等星「全然違います」

月下「検討もつかないであります」

等星「カクテールやカクテル、とも言いますね。要は混ぜて作るお酒です」

月下「黒猫ブランデーのソーダ割りのようなものでありますか」

等星「それも大きな意味ではコックテールですね。でも、実際は300を超える種類があるんですよ。西邦ではとても人気があるので、見様見真似ながら取り入れてみようかと思いまして」

等星「ぱらぱらと本を眺めている等星。

月下はひょこと背伸びをして、その中身を覗いている。びつしりと文字が並んでおり、お酒の種類や分量、混ぜ合わせる手順が事細かに書かれている。

等星「実際のバーに行つてみるのが一番早いんですけど

どねえ。ですが、人形ということでびっくりさせるかもしだす……いまだに踏み出せないんです」

月下「では、月下と一緒に行きますか」

等星「ふふつ……ありがとうございます。ふたりで行けば怖くないですね」

なんでもないように月下が言うので、つい等星は顔をほころばせる。

等星「でも、げっちゃんと一緒だと、子供はダメだと言われてしまうかもしません」

月下「人形に、人間の年齢は当てはまらないであります」

等星「そうなんですけど、なかなか理解してもらえないせんし……」

月下「それに」

いつも通りの無表情な様子で、月下は言葉を続ける。

月下「月下はバーに行つたことがあるあります」

等星「え——」

本をめくる手をぴたりと止めて、丸い視線を向ける。

等星「そ、そうなんですか……意外ですね。バーの先輩だったなんて……」

月下「月下は子供ではありませんので」

簞星「ぜひお話を伺いたいです。いつバーに行つたんですか?」

月下「あれは桜の頃でありました。ナギから電話で呼ばれたのであります」

黒猫亭のオーナーの名前を挙げる。簞星や月下をはじめ、人形たちを再調律した技師もある。

簞星「もしかして、ふたりでゆっくり飲みたいとか? お仕事の悩みとか……」

月下「財布を忘れたので、持つてきてくれと頼まれたのであります」

簞星「な……なるほど」

いかにもナギらしい。容易にその光景を想像できた。

月下「ナギは女性と一緒に、しつぽりと飲んでおりまして……」

簞星「え、誰でしょう。少しどキドキしますねえ」

月下「よく見ると、おとめさんがありました」

簞星「あ、ああ……いつものふたりなんですね」

月下「お花見のあと、飲み足りなさを覚えたそうであります。そこで月下も一杯飲んでいかないかと誘われ

たのであります。マスターにお任せで、と頼んだところ……」

簞星「どんなコックテールを飲んだのでしょうか?」

月下「ミルクを出されたのであります」

メモを取りかけた手をびたりと止めている。

そして、はあ、と深い嘆息。

簞星「やつぱりそうなりますよねえ」

月下「人形に、人間の年齢は当てはまらないであります」

簞星「でもやつぱり、お酒は勧めづらいですよ。酔わないとはいえ……」

月下「子供ではないのですが……」

視線を落としている月下。

いつもどおりの様子だが、その中に、いつもとは違う感情が潜んでいるのを、簞星は感じ取っていた。

簞星「ふーむ……」

ぱらぱら、と本をめくっている。さつきまで取つていたノートを開いて、お酒の銘柄を確認する。

簞星「ねえ、げっちゃん。エッグノックってコックティー

月下「エッグノック……ありますか？」

簫星「ブランデーにミルクと卵、それに砂糖を混ぜて作る、滋養あるお酒だそうです。作ってみたいのですが……」

につくりと微笑んでいる簫星。言わんとすることが

分かつたのか、月下はぱちりと目を開いた。

簫星「げっちゃん、お客様になつてくれませんか？」

月下「お安い御用であります」

簫星「ふふ……感謝します。では、扉から入ってきてもらえませんか？」

月下「了解しました」

ぴつと立ち上がりると、律儀に扉を開けて、一度外へ。

そしてすぐに鈴を鳴らして店内へと足を踏み入れる。また、春の名残の香りがした。

簫星「いらっしゃいませ、BAR黒猫亭へようこそ☆

満面の笑みで、小さなお客様をお出迎えしていた。





灰桜の特製メニュー帳

執筆／丘野塔也

挿絵／浅見百合子



電灯スイッチをOFFに倒す、小気味よい音。

蠅燭を息で吹き消すかのよう、ふっと軒先のランプが消える。

立て看板が室内にしまわれて、ひっそりと眠つてい。足元では黒猫のシャノが丸くなり、大きなあくびを漏らしていた。

篠星「みなさん、お茶にしましよう」

閉店後の黒猫亭は、なんとも氣怠い空気に包まれていた。

レーツエル「本日のお茶請けはシフォンケーキですの」

人數分の紅茶を運んでくる篠星。

その後ろからは、レーツエルがお茶菓子を手に続く。

篠星「ちょっと作り過ぎちゃいましたかねえ」

月下「週末なので、備えは必要であります」

篠星「明日まで保てば、一番良かつたんですけど」

灰桜「みゅみゅ……でしたら、わたしの出番ですね！」

ぴょんと、なんとも得意げな表情で立ち上がる灰桜。

灰桜「明日まで食べ尽くさなければいけないお菓子……わたし、お役に立ちます！」

そこに、パンパンと手を叩く音が響く。

鴉羽「まだお仕事は終わっていないわよ」

カウンターの向こうに立っているのは鴉羽だ。

灰桜「ですが、お掃除はもう終わらせたのですが」

鴉羽「ええ、みんなのおかげで随分早く終わつたわ。だから余った時間を有効活用しないと」

灰桜「ですから、みなさんでお茶とお菓子を堪能

……」

鴉羽「抜き打ちだけど、接客の試験をしましよう」

灰桜「みゅっ！」

不意の提案にくぐもつた声を上げて、思わず仰け

反つている。

レーツエル「お姉様？ お姉様大丈夫ですか？」

灰桜「ううう……なんだか氣分がああ……」

レーツエル「大変ですの、緊急メンテに連れていきま

せんと」

よつこらしょ、と肩を担いでその場から連れ出そうとする。

鴉羽「下手な芝居はよしなさい」

もちろん、鴉羽にはお見通しだった。

灰桜「ですが、急に言われましてもお……」

鴉羽「こういうことは抜き打ちだから意味があるの。  
じゃあ、まずは灰桜」

灰桜「はい……」

鴉羽「あたしが入り口から入つてくるから、お客様  
だと思って接客してくれる?」

渋々メニュー帳を手に、レジ脇に立つてある。  
篠星「灰ちゃん、ファイトですよおー」

月下「健闘を祈るであります」

篠星と月下は紅茶を手に、微笑ましげにそんな様子  
を見つめていた。

ちりんと鐘の音。鴉羽がドアを軽く開閉して音を鳴  
らす。

鴉羽「すみませーん」

そして、いま来客したという体で声を投げかけた。

灰桜「いらっしゃいませ、黒猫亭によこそ！ お席  
にご案内しますっ」

レーツエル「お姉様、さすがですわ！」

多少固さはあるものの、慣れた身のこなしで席に案  
内している。

灰桜「ご注文はお決まりですか？」

鴉羽「そうねえ……」

ぱらぱら、と手渡されたメニューを一瞥して。

鴉羽「軽く食事をしたいんだけど、お勧めは何かし  
ら？」

灰桜「みゅっ……そ、それは、お客様の心の赴くま  
にですっ」

鴉羽「それが分からぬから聞いてるんでしょ」  
灰桜「そ、そー言われましても……」

イレギュラーな事態に、途端にパニックになつてい  
る。

レーツエル「……お姉様。ほら、こう白くて三角の  
……」

近くにいるレーツエルが、小声でこしょこしょとビ  
ントを送る。

灰桜「そうです、お客様っ」

ぱん、と手を打つて、

灰桜「おにぎりはいかがですか？」

鴉羽「ここは喫茶店と聞いたんだけど?」  
提案したはいいものの、つれなくダメ出しされてし  
まう。

レーツエル「……違いますわ、ほら、きゅうりやツナ

が入っている……！」

灰桜「そーか、そっちですねつ。お客様っ」

再びうんうん、と頷いている。

灰桜「かつぱ巻きはいかがですかっ」

鴉羽「ご飯から離れなさい」

灰桜「みゅう、鉄火巻のほうがよろしいでしようかっ」

レーツエル「お姉様、ツナ違いですわ！」

鴉羽「というか、さつきから聞こえているなんだけ  
ど!?」

レーツエル「退散ですわっ」

音もなく逃げていくレーツエル。

鴉羽「灰桜。レーツエルが言いたかったのは、サンド

イッチよ」

灰桜「面目ないです……」

頭を抱えている灰桜。

等星と月下も苦笑するしかなかつた。

鴉羽「もうちょっと練習しておきなさい。少なくとも  
メニュー帳にある物を勧めるように」

灰桜「みゅみゅ……メニュー帳にある物……」

じっと手元を眺めている。

灰桜「そうです！」

鴉羽「どうしたの？」

灰桜「メニューに絵を描いてみてはいかがでしよう  
か？」

鴉羽「絵って……」

灰桜「文字だけなので、絵を添えると分かりやすいと  
思います！」

等星「いいですねえ、注文のとき味や量が想像しやす  
くなりますね」

鴉羽「それはそうだけど……」

灰桜「わたし、描いてみますっ！」

鴉羽「……大丈夫なの？」

灰桜「任せてください！」

備品棚を開けて、半紙とクレヨンを取り出してくる。

灰桜「素晴らしいメニュー帳を作つてみせます！」

そう言つて、伸び伸びとした線を引き始めた。



他の人形全員の接客試験も終わった頃……。

灰桜「できました！」

ハサミと糊も駆使して、灰桜特製のメニュー帳が完成していた。

鴉羽「なかなかカラフルね。中身の方は……？」

灰桜「はい、紹介します！」

自信満々にページを捲っている。

灰桜「昔々あるところに。河童の三郎太が住んでおり

ました」

鴉羽「絵本になつてるじゃないの！」

灰桜「みゅ！ そういわれてみれば！」

簞星「これでは内容が分かりませんねえ」

月下「使い物にならないであります」

鴉羽「みゅみゅみゅ……」

頭を抱えて反省している姿に、鴉羽はため息を漏らす。

鴉羽「まったく、メニューをこんなにして……」

鴉羽「……と思ったんだけど」  
数日後の黒猫亭。

そこでは高らかに、灰桜の声が響き渡っている。

灰桜「男は川辺で一休み。握り飯を食べようとしたところびっくり仰天。河の中から水かきの付いた手が伸びてきました」

灰桜は特製メニュー帳を手に、子供に河童の話を読み聞かせている。

母親「すみません、助かります」

恐縮しきりの母親。

幼子を連れて黒猫亭に来てくれたはいいものの、慣れない雰囲気に戸惑ったのか、泣き出してしまったのだ。

だ。

鴉羽「いえ、こうやつてお役に立つことも、人形の仕事ですから」

灰桜がなだめようと、絵本代わりにメニュー帳を読み上げることにした。

効果はできめんで、子供はすっかり泣き止んで、目



を輝かせていた。

鶴羽「……あの子のお手柄ね」

くすりと微笑みを浮かべる。

店内には灰桜の楽しげな声が響いていた。



薰り高き秘密

執筆／丘野塔也

挿絵／浅見百合子



カンカン帽と扇子は、夏の皇都の正装と言つてもいい。

開襟シャツか浴衣を合わせて、草履を履けば一丁上がり。流石に黒猫亭の来客はそこまで着崩した格好はしていないが、本音では涼を求めていることだろう。皇国は温帯気候で知られているが、嘘ではないかと思う。じめりと空気が肌にまとわりつくような湿度と、仇をにらみつけるように照りつける太陽は、この時期の風物詩だ。

レーツェル「ご注文はお決まりですか？」

窓の外では、今日もお天道様が猛威を振るつてゐる。

ほうほうの体で逃れてきた様子の家族連れに、お冷

を差し出しつつ声をかける。

父親「ライスカレーをもらおうかな」

母親「私もライスカレーを」

子供「僕もカレー！」

レーツェル「ライスカレー三人前……と」

メモを確認しながら、ふと素朴な疑問が浮かんでくる。

レーツェル「皆様、お揃いですね。この時期はカレー

を注文するお客様ばかりでございます」

父親「夏はカレーに限るよ、青春の味だ」

母親「懐かしい味がしますものね」

子供「カレーが一番のごちそうだよ！」

レーツェル「さようござりますか……」

子供「お姉ちゃんはカレーを食べたことないの？」

レーツェル「わたくしはローベリア製なので、その辺

りの事情には疎いんですけど……」



レーツェル「……と、いうことがございまして」

すっかり日が、夜の冷たさが、ようやく石畳の熱を冷ました頃。

閉店準備を終えた黒猫亭で、レーツェルはぽつりと

つぶやいた。

鴉羽「確かにこの時期、カレーは人気よね」

月下「売上の柱であります」

等星「暑いと辛い料理が食べなくなるんでしようねえ」

灰桜「カレーを食べているとき、皆さんとても幸せそ

うです！」

それぞれ冷却水代わりのレモンソーダを飲みながら、黒猫亭の面々は和やかに言葉をかわしている。

レーツェル「わたくし、カレーを食べたことが無いんですの」

灰桜「みゅ!? そうなのですか？」

レーツェル「ええ。ですからどうして皆さんカレーにご執心なのか、その理由が分かりませんの」

灰桜「確かに、そう言われてみれば」

レーツェル「カレーの味付けは、皇国の伝統的な料理とはまるで違いますわ」

筈星「元は熱帯地方のスペイン料理ですからねえ」

レーツェル「ですが直接伝わったわけではなく、一度ローベリアをはじめとする西邦を経由して皇国にやつてきたらしいですの」

鴉羽「よく知っているわね、確かにカレーのレシピは洋食の技法よね」

レーツェル「それがどうして、ここまで皇国人の心を掴むのでしょうか？」

月下「カレーは最も人気のある軍隊食であります」

ぽつりと小さな口を開いて、月下が疑問に答えてくれる。

月下「栄養価に富み、調理も容易であります」

筈星「懐かしいですねえ。私もよく炊事係さんのお手伝いをしました」

灰桜「みゅみゅ？ 兵隊さんになるとカレーが食べられるのですか？」

鴉羽「毎日じゃないわよ。毎週金曜日に振る舞うのが伝統なの」

レーツェル「なるほど、従軍中にその味を覚えた復員兵が広めたんですね……しかし、それだけではなさ

そうな……」

レーツェル「領きながらも、まだなんともしつくり来ない。」

筈星「そうだ、レーちゃん」

ほん、と筈星が手を叩く。

筈星「そんなに気になるんだつたら、試しに作ってみてはどうですか？」

レーツェル「わたくしが、ですか？」

筈星「レシピをお書きしますよ」

レーツェル「あいにく、料理の経験はございませんの」

鴉羽「あれだけナイフが使えれば大丈夫よ。あたしが教えましょうか」

レーツェル「鴉羽さんが……ですか？」

鴉羽「ええ、今後のためにも、覚えておいてもらえると助かるわ」

灰桜「レーツェルさんのカレー、楽しみですっ！」

レーツェル「お姉様まで……」

月下「今晚の賄いは任せたであります」

レーツェル「……分かりました。そこまで仰るのなら」



鴉羽「じやあまず、お野菜を切りましょう」

レーツェル「お安い御用ですわ」

包丁を手に取る。

くるくるくる、と回してから構えると、電灯の明かりが妖しく反射した。

鴉羽「危ないから、包丁で遊ばないでね」

レーツェル「う……分かつていますわ」

鴉羽「まずは玉葱から」

レーツェル「わたくしの腕前、見せて差し上げます」  
軽く空中に放り投げる。

レーツェル「……はっ！」

包丁を一閃すると、たちまち輪切りになつてまな板に転がつていた。

レーツェル「ちよろいもんですか」

鴉羽「そうじやなくて、みじん切りにするの」

レーツェル「う……ダメですか？」

鴉羽「全然ダメね。こうやって丁寧に縦横に切れ込みを入れてから……」

巧みに包丁を使って、玉葱をみじん切りにしている。

鴉羽「お料理は丁寧な仕込みが大事なの」

レーツェル「めんどくさいですかねえ」

愚痴りながらも、鴉羽を真似て包丁を動かしていく。  
そのうち、玉葱、人参、じやがいもを切り終わつていた。

鴉羽「食材を炒めている間に、昆布出汁を取りましょ

うか」  
油を引いたフライパンを振つている隣で、鴉羽が手早く鍋を用意する。

レーツェル「出汁、ですか？」

鴉羽「ええ、水じやなくて、出汁と少しのお酒で煮る」ととってもおいしいの」

レーツェル「洋食では、昆布出汁は使いませんわ」

鴉羽「でも、そうすると皇国風の味付けになるのよ」

レーツェル「なるほど……皇国人の舌に合わせているんですね」

鴉羽「本場のカレーはもつとスペイスが効いているらしいけど、それだと辛すぎるから」

レーツェル「なるほど、分かつてきましたわ」

少しずつ、野菜を炒める手に力がこもってくるのが分かる。

レーツェル「西邦と東邦の出会い、それらを渾然一体とする創意工夫……そしてなにより、料理人の飽くなき情熱。それらが相まって、カレーをこんなにも魅了的しているのですね」

鴉羽「ちょっと大きさだけど、そういうことね」

レーツェル「わたくし、料理はじめての経験ですが、その楽しさが分かってきましたわ！」

鴉羽「ふふ……その調子よ。隠し味として、お醤油

を入れたり、お味噌を足したりする場合もあるらしいわね」

レーツェル「カレーとは自由な食べ物ですのね」

しななりした野菜が、フライパンの上で踊っている。

レーツェル「では、こちらの野菜をお鍋に入れて、次にお肉に焼き目をつけて……」

鴉羽「いいわね、とってもおいしそう」

箒星の料理メモを確認しながら、ますます調理に熱が入る。

レーツェル「こちらで隠し味を加えましょう。お酒、お醤油、お味噌に胡椒にニンニク生姜に、ついでに蜂蜜も……」

鴉羽「ちょ、ちょっとちょっと！」

レーツェル「なんですか？」

鴉羽「隠し味は少しでいいのよ、それじゃ入れすぎよ……！」

レーツェル「心配性ですわねえ。わたくしにお任せくださいませ」

レーツェル「そうだ、コーヒーを入れると苦みが加わるのではないかでしょうか？」

鴉羽「レーツエル！ いい加減に……！」



レーツエル「完成、ですわ」

鴉羽「う……こ、これは……」

小皿に取ったカレールウに、口をつけている鴉羽。  
目を丸くして、言葉を失っている。

鴉羽「……おいしい……」

レーツエル「……くすっ」

鴉羽「メチャクチャな調理法だと思ったけど……甘味  
とコクの塩梅が絶妙で、奥深い旨味の中に、ぴりりと  
秘めた辛さがあつて……」

レーツエル「どうやら、秘めた才能が開花してしまつ  
たようですわね」

鴉羽「……いける」

レーツエル「鴉羽さん？」

鴉羽「このカレーなら、京都のどの店にも負けない  
わ！ 早速新しい名物にしましょう！ 大繁盛間違い  
無しよ！」



なにやら野望に燃えて、拳を力強く握っている。

鴉羽「あたし、マスターに報告してくるわ。その間にレシピをまとめておいて！」

レーツェル「ちょっと、鴉羽さん……！」

メモと万年筆を押しつけられる。

ひらりと踵を返すと、髪を舞わせて去っていった。

レーツェル「……」

くるくるくる、と指先の上で万年筆を回す。

レーツェル「全部適当に入れたので、二度と再現できない……と言つたら、なんて反応するでしようか？」  
ぽつりと呟くと、そつとメモと共に机の片隅へと押しやる。

レーツェル「まっ、灰桜お姉様に食べていただきましょ  
う。きっと喜んでくれますわ♪」

細かいことはいつたん後回しにして、薫り高い力  
レーをお皿に盛り付けていた。



買い出しのイロハ

執筆／丘野塔也

挿絵／浅見百合子



早朝の黒猫亭は、どこかひんやりとした空気に包まれていた。京都をあまねく照らし出す朝日。その柔らかな熱が届くまでの、ほんの少しの猶予。まだ石畳は夜の冷たさを覚えている様子だ。

月下は柄杓を手に、先程くんだばかりの井戸水を撒いていた。石畳の灰色が、みるみる濃く染まっていく。夏の盛りの間、来客に少しでも涼を取つてもらおうと、毎朝の習慣になっている。といつても残暑の頃だから、それもあと数週間のことだろう。

レーツエル「月下さん、精が出ますのね」

軽い足取りで、黒猫亭一番の新顔がやつてくる。

月下「何用でありますか」

水を撒く手を止めずに、ちらりと視線を向ける。

レーツエル「鴉羽さんから買い出しメモを預かってきましたのですわ」

後手に持ったメモをひらりと取り出す。

毎朝の買い出しは月下の役目で、それ自体は馴染みの光景だ。だが買い出しメモは、いつも一枚か二枚。しかし今日はその倍、いや三倍はある。

月下「どうしてこんなに?」

レーツエル「なんでも、急に団体客の予約が入つたとか」  
月 下「これほどの量となると、風呂敷包みに入りきるかどうか……」

柄杓を置いて、メモを確認しては、指折り計算をしている。

レーツエル「そういうことなら」

その反応を予期していたように、レーツエルが声を上げる。

レーツエル「このわたくしがお助けいたしましようか? 買い出しにご一緒に、荷物を手分けして差し上げ……」

月下「結構であります」

レーツエル「どうしてですか!」

月下「買い出しは自分の役目であります」

レーツエル「このわたくしがせつかく助け舟を出して

おりますのに」

月下「それでは」

バケツを手に大急ぎで打ち水を済ませると、月下は

買い出しの準備を整えていた。



？？？「おつと」

その瞬間、物陰から音もなくさつと進み出る姿がある。

月下「うぬぬぬ……」

山の手城のお膝元。軒を連ねる市場の一角。

店員「月下ちゃん、大丈夫かい？」

すでに風呂敷包みはパンパン。両手に紙袋を抱えて、  
よろよろとバランスを取っていた。

月下「心配ご無用でありますっ……」

店員「路面電車までうまく辿り着けるといいんだけど  
……」

月下「あと、ハムとソーセージを買わなければいけませんのでっ」

店員「そりゃあ無茶だよ」

月下「お客様が待っているのであります……うぬぬぬ  
ぬ……」

まるで酔っ払いのように、フラフラと進んでいく月  
下。

紙袋の中身は、重みで左右に振られて……

月下「わ、わわっ……！」

ぐらり、と紙袋が大きく傾きそうになる。

？？？「危ないですわ」

そう言って、そっと支えてくれる姿がある。

ふたつに結った髪。ベレー帽にマント……。

月下「レーツエル？」

それは紛れもなくレーツエルの姿だった。

レーツエル「やつと追いつきましたわ」

月下「どうしてここに……」

心なしかほつとしつつも、すぐに顔を引き締めている。

月下「鴉羽から頼まれたので？」

レーツエル「いいえ、わたくしのうつかりです。実は渡し忘れたメモがございまして」

月下「ま、まだ増えるのでありますか？」

その言葉通り、レーツエルは追加のメモを取り出している。

レーツエル「よろしければ、お手伝いさせていただけませんか？」

月下「ですが……」

レーツェル「ローベリア製人形の手を借りるのは恥ずかしい、などとは申しませんよね？」

微笑みを浮かべているレーツェル。

対照的に、月下はどう返していいやら分からぬ様子で口ごもっていた。

レーツェル「では、こういうのはいかがでしょう？」

そんな様子を気にしてかどうか、ぴっと人差し指を立てる。

レーツェル「今後の黒猫亭のために、買い出しのイロハを学びたいんです」

月下「だから自分についてくる、と？」

レーツェル「ええ、ご教授願えますか？」

月下「…………」

視線を落として、しばらく逡巡している月下。

月下「分かったであります」

やがていつものクールな表情で顔を上げていた。

月下「では、遅れないようについてくるであります」

レーツェル「ええ。あ、お荷物お手伝いいたしますの

……」

月下から紙袋をひとつ受け取ると、次のお店に向かって歩き始めた。



月下「早朝の市場は混雑しており、迅速な移動のためには経路が肝要であります」

買い出しを終えたふたり。

両手に荷物を抱えながら、帰路に就く。

レーツェル「もつとも効率のよいルートを選ぶのですね」

月下「地図だけを頼りにしてはダメであります。人気の食材は売り切れることもありますので」

レーツェル「優先順位がありますのね。勉強になります」

少し落ち着いたところで、月下は買い出しの心得を説いていた。

月下「また、時には道中に障害があることも」

レーツェル「と、言いますと？」

月下「例えれば通行止めや工事。場合によつては人だか

りでまともに前に進めないことも」

レーツエル「ですが、今日のところはその心配はなさ

そうですわね」

月下「……ひつ」

小さな悲鳴を上げて月下が立ち止まる。

レーツエル「月下さん？」

月下「障害であります」

レーツエル「別になにも……あら」

ふと、市場の片隅に目を留める。

小さな犬がじつとこちらに瞳を向けながら、舌を出  
していた。

首輪もしていないところを見ると、野良犬のようだ。

月下「目を合わせてはダメであります。ゆっくり通り  
すぎるであります……」

ぎゅっと荷物を抱きながら、そろそろと歩き出す。  
目の前を通り過ぎようとして……。

月下「……え？」

レーツエル「おお、よしよしよしよし」

そつと野良犬の頭を撫でているレーツエル。

きゅんきゅんと心地よさそうに鳴き声を上げなが

月下「ひいっ！」

銳く犬が鳴くと、びくっと体を震わせていた。

わんっ！

月下「つうううううう……！」

もはやこれまでと、ぎゅっと目を閉じている月下。

しかし、いつまでたっても足下に、小さな獸が飛び  
かかってくる様子はない。

月下「しまったでありますっ」

レーツエル「ああ、そんなにジタバタしては……！」

野良犬はそれを見て目を輝かせて、尻尾をぶんぶん  
振り回している。

月下「ますいであります……！」

そのうち地面を蹴つて、月下めがけて全力疾走して  
きた。

月下「！」

レーツエル「月下降さん、落ち着いてくださいませっ」

月下「おおお、落ち着いています」

レーツエル「ソーセージが紙袋からみ出しています

ら、目を細めている。

レーツェル「わたくし、動物には好かれるたちです。お腹が空いているようですね」

ナイフを取り出すと、連なったソーセージをいくつ切り落としている。

レーツェル「安全な通行のため、拝借いたします」

口元に持っていくと、犬はおいしそうに頬張つていた。



月下「ただいま戻りました」

からん、とドアベルが鳴る。

レーツェル「任務完了ですの」

苦難を乗り越えて、無事黒猫亭に辿り着く。

鴉羽「お帰りなさい、ふたりとも。荷物が多くて大変だつたでしよう」

さつそく鴉羽が近づいてきて、労いの言葉をかける。

レーツェル「とても勉強になりましたわ」

鴉羽「荷物いただくわね。……あら？」

月下の紙袋を受け取って、首を傾げている。

鴉羽「このソーセージ、どうしたのかしら。いつもより量が少ないような……」

レーツェル「それは……」

なんと説明したものか口ごもっている。

月下「申し訳ございません」

しかしレーツェルが答える前に、月下が口を開いていた。

月下「自分の不注意で落として、犬に食べられてしまつたであります」

鴉羽「そう……そういうこともあるわね。余分に買つてあるから大丈夫よ」



月下「では、仕事に戻るであります」

厨房に無事食材を届けて、布巾を片手にホールに戻る。

レーツェル「月下さんっ」

その背後から、レーツェルが小走りに近づいていた。



レーツエル「ありがとうございます、ですの」

そつと耳元に顔を寄せて、感謝の言葉を囁く。

月下「別に、お礼を言わることでは……」

レーツエル「ですが、わたくしをかばってくれました」

月下「それは、まあ……せめてものお礼であります」

目を反らして、恥ずかしげになにやら口ごもつて。

りがとうであります……」

月下「買い出しを手伝ってくれて……こちらこそ、あ



黒猫亭のおばけ

執筆／丘野塔也

挿絵／浅見百合子



灰桜「おばけですよ、おばけ！」

残暑も終わり、夜の静けさの中に、秋風の薰りがまざり始めた頃。

閉店後の黒猫亭のホールでは、ひとり熱弁を振るう姿があつた。

簫星「灰ちゃん、いったいどうしたんですか？」

厨房の清掃を終えた簫星は、手ぬぐいで手を拭きながらホールへと顔を出す。

灰桜「あっ、簫星さん、聞いてください」

レーツエル「お姉様が、とても怖い思いをしたそうです。わたくしが代わってあげられたら……」

ややわざとらしく涙を拭きながら、レーツエルが同情している。

灰桜「わたしですね、厨房でおばけを見たんです！」

簫星「……おばけ？」

灰桜「はい！ 簫星さんも見たことがありますか？」

月下「あいにく、私は経験ないですわ！」

灰桜「でも、本当にいたんですよ！」

月下はまともに取り合つておらず、首を左右に振つ

て いる。

簫星「いったい、どんなおばけだったんでしよう？」

灰桜「はい！ あれは草木も眠るうしみつつき……」

簫星「丑三つ時、ですね」

灰桜「寝ようとしたんですね、髪飾りがないことに気づいたんです。ホールに落としたのではないかと思つて降りてきたら、厨房に灯りが点いていたんです」

簫星「毎晩消灯はちゃんとしているので、それはおかしいですね」

灰桜「はい、わたしも不思議に思つていたら、中に入影が見えてですね。ですが、声をかけても返事がなく……」

簫星「……それで？」

灰桜「そつとのぞいてみたら……そこには誰もいなかつたんです！」

レーツエル「お姉様、身の毛もよだちますわ！」

大げさに怖がつて いるレーツエル。

灰桜の言うことなので迫力はあまりないが、それでも不思議な話ではある。

灰桜「おばけです、おばけ！」

月下「非科学的であります」

灰桜「でも、見たんですよお……」

簫星「いつたいどういうことなんでしょう……そ�だ、からちやん？」

四人から離れたところ、レジで売り上げをまとめている鶴羽に声をかける。

鶴羽「えつ……な、なにかしら」

話を聞いていなかつたのか、小首を傾げている。

簫星「灰ちゃんの話です。夜中に厨房に灯りが点いて、誰かがいる気配があつたとか」

鶴羽「うーん、單なる見間違いかしら」

灰桜「ですが……」

鶴羽「でも、消灯は忘れないようにしなくちやね。あたしも気をつけてみるわ」

とんとん、と帳簿をまとめている。

鶴羽「さつ、そろそろ休みましょ」



その日の夜。

黒猫亭の厨房に、ほのかな灯りがともる。草木も眠る丑三つ時とはいわないが、とつぶりと夜が暮れた頃。

長い影を不気味に揺らしながら、そつと足を踏み入る姿がある……。

簫星「おばけさん、み一つけた！」

？？「きやああ!?」

ランタン片手に、さらにその後ろから駆け寄ってきた簫星。

背後から肩にぽんと手をおいて、どこか楽しげに声を上げていた。

鶴羽「あ、あう……」

簫星「やっぱり、からちやんでしたねえ」

灯りに照らされる横顔は、鶴羽のものだつた。

鶴羽「ど、どうして分かつたの？」

簫星「だつて灰ちゃんの話、本当は聞こえていましたよね？」



鴉羽「う……それは」  
簫星「もし不審者だったら一大事じゃないですか。それなのにあのそつけない態度……びんと来たんですよねえ」

鴉羽「はあ……かなわないわね」

観念した様子で、肩を落としている鴉羽。

簫星「こうして様子を見に来て、正解でした」

鴉羽「そうよ、灰桜が見たというのはあたし」

ごまかしてもしようがないと察したのか、潔く観念していた。

簫星「でも、そのところがよく分からんんですよねえ」

簫星としては、正体を暴きたいというよりも、理由を聞いたかった。

簫星「どうしてこんな夜中に厨房に？」

鴉羽「練習、ですか？」

簫星「……お料理の練習をしていたのよ」

鴉羽「ここのことろお客様も増えて忙しくなつてきましたでしょ。簫星ひとりじや回り切らないこともありますよ」

じやないかって」

篝星「いまのところは大丈夫ですが、確かに危ういときはありましたねえ」

鴉羽「ホールも手一杯だから、ヘルプに入れるのはあたしだけでしょ。でも最近お料理する機会がなかつたから……腕が落ちないかと思つて」

篝星「だから、練習しようと?」

鴉羽「ええ、たまにフライパンを振らないと、どうしても勘が鈍っちゃうから」

鴉羽は黒猫亭のリーダーだけあって、たいていの業務はこなせる。

それは料理も例外ではなく、以前はたまに手伝つてもらうこともあつた。

言われてみれば、ここしばらくは鴉羽が厨房に立つていなかつたかも知れない。

篝星「でも、灰ちゃんに隠さなくともいいんじゃないですか?」

鴉羽「そ、それはそうなんだけど……」

視線を落としている鴉羽。恥ずかしそうに髪をいじつた。

鴉羽「普段先輩として振る舞つているから……改めて

練習を見られるのが、なんだか恥ずかしくて

篝星「はあー、からちやんて本当に……」

鴉羽「な、なによ」

篝星「そういうところ、ありますよねえ」

鴉羽「うう……」

くすりと微笑みを向けると、所在なさげに身を捩つた。

篝星「ですが、分かりました」

袖口をまくり上げる。

篝星「練習のお付き合い、しますね」

鴉羽「……そうね。手伝つてくれると、助かるわ」



篝星「灰ちゃんのことなんですけどね」

フライパンの上でバターがふくぶくと溶ける。

香ばしい匂いが広がる中、鴉羽はバターをフライパンにまんべんなく伸ばしていく。

篝星「誤魔化さなくともいいと思いますよお」

濡れ布巾の上に置いて、じゅつという音とともに、

一度フライパンを冷ます。

鴉羽「そう……そうよね」

筈星「むしろ、からちゃんも努力しているんだと知つて、よりいつそう頑張ると思います」

ボウルの中にはホットケーキミックス。

しつかりふるいにかけて、ダマ一つなく溶かしてある。

鴉羽「そうね、上達への道のりは一つだけよね」

筈星「ええ、何事も練習あるのみですよおー」



筈星「完成ですねえー！」

やがて、三段重ねのホットケーキが出来上がる。

鴉羽「採点はどうかしら？」

筈星「黄金色の焼き目といい、厚さといい、柔らかさ

といい……三つ星ですね☆」

鴉羽「よかつたわ。隣で見られると緊張しちゃうから」

筈星「ふふっ……鬼教官ですか？」

鴉羽「でも、どうしようかしら？」

湯気を上げるホットケーキを見て、なにやら困つている。

鴉羽「こんな夜中に、ホットケーキがこんなにできちゃったわ」

筈星「せつかくなので、みんなにおすそ分けしましょうか？」

鴉羽「それもそうね。灰桜におぼけのこと言わなくちゃいけないし」

苦笑しつつ、お皿を手に取っていた。

そのまま階段を上がつて、灰桜の部屋へと足を向ける。

鴉羽「でも、起きているかしら？」

筈星「レーチャンとなにか話し込んでいたみたいですよ。あ、ほら、灯りが点いてます」

扉からはわずかに灯りが漏れ出している。

どうやらレーツエルとふたりして夜更かししているようだ。

そっとノックをして、そして扉を開いた。

鴉羽「灰桜、レーツエル。夜食はどうかしら……きやああああああ！」

篝星「ど、どうしたんですか？」

不意に上がった悲鳴に、部屋に駆け込む。

灰桜「あっ、篝星さん！」

篝星「そ、その顔は……」

灰桜の顔。そこには、墨汁でびっしりと文字が記されている。

篝星「羽子板の罰……ですか？」

レーツエル「違いますわ」

筆を手に、レーツエルが自信ありげな表情を見せる。

レーツエル「これは、おばけ対策ですの」

鶉羽「どういうこと？」

灰桜「はい、こうして顔にお絆をかけば、おばけが寄つてこなくなるのだそうです！」

レーツエル「お姉様、これでもう安心ですわ！」

篝星「ちょっと意味が違いますねえ！」

灰桜「みゅみゅ！ 鶉羽さん、そのホットケーキはいつたい……」

鶉羽「ああ、これは夜食にどうかと思つて。あと、話さなくちゃいけないことがあるんだけど……」

灰桜「素敵です！ あ、では、わたし月下さんも呼ん

できます！」

居ても立つても居られない様子で、部屋を飛び出していく。

鶉羽「ちょっと待ちなさい、その顔で行くの……!?」

軽快にはしごを登る音が聞こえてくる。

どうやら月下は屋上にいるようで、灰桜が声をかけて……。

月下『おっ……おばけであります!?』

夜空に、月下の悲鳴に似た声が響いていた。



それぞれの意味

執筆／丘野塔也

挿絵／浅見百合子



それは、ある黒猫亭の屋下がり。

微妙に開けた窓から、秋の涼やかな風が吹き込んでいた。

灰神楽「むむ……」

灰神楽は布巾を手に、お皿を下げ終えたばかりのテーブルに向かい合っていた。

灰神楽「ありがとうございます。感謝を込めて……」

丁寧に丁寧に、木目に沿って拭き掃除。

灰神楽「いらっしゃいませの気持ちを込めて……」

きゅつきゅっと小気味よい音を響かせながら、まるで磨くようにテーブルを拭いていく。

灰神楽「ありがとうございます。いらっしゃいませ、ありがとうございます。いらっしゃいませ……」

鴉羽「ちょ、ちょっと灰神楽」

灰神楽「……なに？」

鴉羽「テーブルは、その辺りで大丈夫よ。フロアに戻つてくれるかしら？」

灰神楽「もう、きれいになつた？」

鴉羽「ええ、ぴかぴかね。まるで顔まで映りそう」

灰神楽「お姉ちゃんが言つてた。店内をきれいにする

と、心もきれいになるつて」

鴉羽「あの子もいいこと言うわね。まあ、程度までは教わらなかつたみたいだけど……」

まるで鏡のよう磨き上げられたテーブルを見つめて、ため息交じりにつぶやいている。

灰神楽「程度つてなに？」

鴉羽「今度、あたしが教えるわ」

灰神楽「分かった」

柔らかく微笑んで、布巾を戻す。

念入りに手を洗うと、メニュー表を胸に抱いて、レジ脇でびんと背を伸ばした。

ドアベルが、軽快に鳴り響いた。

千代「こんにちはあ！」

ひょこりと明るい顔を見せるのは、千代だった。

灰神楽「千代さん、こんにちは」

千代「ふふふ……」

腰に手を当てて、どこか嬉しそうに胸を張つていて。

灰神楽「でも、人手は足りてるから、お手伝いはいらなくと思う」

千代「違うよ。今日はね、お客様として来たんだよ」

灰神楽「お客様さん……？」

千代「アイスクリーム屋さんのアルバイトでね、一週間連続で完売だったんだ。だから金一封をもらつちやつて」

袖からなにやら封筒を取り出すと、誇らしげに掲げている。

千代「お腹いっぱい、オムレツを食べに来たんだよ」

灰神楽「じやあ……」

灰神楽はしばらく考えてから、やがて視線を向けると、につこりと微笑みを向けた。

灰神楽「千代ちゃん、いらっしゃいます」



千代「どうして灰神楽っていう名前なの？」

灰神楽「ご注文のオムレツとレモンソーダをお持ちしました」

千代「ふむふむ、ありがとう」

千代「オムレツを給仕すると、千代は腕を組んで大げさに頷いていた。

千代「今日も素晴らしい輝きのオムレツだねえ」

灰神楽「……はい、当店自慢の一品でござります」

こういうときどう返せばいいのだろうと、少し迷いつつも、灰神楽は受け答えしていた。

千代「すっかりお店にも慣れたみたいだね」

灰神楽「……そう？」

千代「うん、新人とは思えないよ」

灰神楽「なら……よかつた」

ほつとした表情で、ほほ笑みを浮かべる。

そつと胸元に視線を向ける。そこには研修中である

ことを示す、灰神楽の名札が付けられている。

千代「ねえねえ、灰神楽さん」

ぱたぱたと足元を弾ませながら、何気ない様子で千代が口を開く。

千代「どうして灰神楽っていう名前なの？」

灰神楽「どう……して？」

千代「なにか由来があるのかなって」

灰神楽「由来……って？」

千代「その名前をつけた経緯とか、意味とか」

千代「私はね、お母さんがつけてくれたんだ。千代に

健やかでありますようにって」

灰神楽「由来……由来は、みんなにある……？」

いまいち合点がいかず、灰神楽は首を傾げた。

灰神楽「ワタシの名前の由来……分からない。お姉ちゃんの真似をしただけ……」

しかし、千代の言葉は少なからず灰神楽の興味を引いたようで、しばらく視線を巡らせてから、やがてじつと視線を向けていた。

灰神楽「知りたい、みんなの名前のこと」

簞星「私の名前の由来、ですか？」

灰神楽「……うん」

閉店後の黒猫亭。

灰神楽は、厨房を掃除中の簞星の元を訪れていた。

いつものどこか無表情な佇まいだが、その手にはメモ用紙と鉛筆まで持参しており、熱意がうかがえる。

簞星「そうですねえ、私は流星型の自律人形なんですよ」

そんな姿勢を微笑ましく思ったのか、簞星は丁寧に話を続ける。

灰神楽「流星……型？」

簞星「砲撃専用支援人形です。みんな名前には星の名前が入っているんです。たなびく星のように敵陣に砲弾を降り注ぐ……そんな様子から簞星と名づけられたんですね」

灰神楽「簞星は……自分の名前、好き？」

少し固い声色の雰囲気を感じたのだろうか、そんな疑問を投げかけられる。

簞星「最初は、あまり好きではありませんでした。ですが、私にこんなことを言ってくれた人がいました」過ぎ去った日々を懐かしむような、遠い目で簞星は続ける。

簞星「夜空に輝く星のよう、寄る辺だと」

灰神楽「あ……」

簞星「だから、いまは……自分の名前が好きですねえ」どこかはにかむような、そんな笑顔を浮かべていた。

鴉羽「あたしの名前はマスターにつけてもらつたの」

お風呂の湯気の中。

並んで入浴しながら、鴉羽はどこか嬉しそうに語つ

た。

鴉羽「元々は戦闘用の人形だったんだけど、でも壊れてしまつたから。皇軍機でもないから、同じ名前って訳にもいかないでしよう?」

灰神楽「名前は……変わることもある?」

小首をかしげる灰神楽。

鴉羽「そういうこともあるわ。過去の自分との決別、新しい自分との出会い……いろんな意味があるけどね」

灰神楽はその言葉をじっと興味深そうに聞いていた。

鴉羽「あたしの髪の色から、名前をつけてくれたんだって。濡れたような黒」

灰神楽「……ワタシの髪も、黒」

鴉羽「ええ、灰神楽の髪もとつてもきれい」

灰神楽「ワタシの髪は、ずっと黒色、だつた?」

鴉羽「それは分からぬわね。もしかしたら灰神楽も、新しい自分を見つけたのかも」

その言葉に、灰神楽は何度もまぶたを瞬かせた。

レーツェル「わたくしは生まれ変わったのですわ」

お茶を手にやつてきたのは、レーツェルの部屋だ。  
少し狭い、ひとり用の寝室。本来はゲストルームなのだという。

レーツェル「おそらく、ローベリアで生まれたときには、まったく別の名前がついていたのでしょうか」

灰神楽「でも、新しい名前をつけてもらつた?」

レーツェル「ええ、灰桜お姉様の、真の妹として生まれ変わった際に」

灰神楽「ふむふむ……」

レーツェル「新参の自律人形である灰神楽さんには想像もできないほど、わたくしのお姉様の間には深い絆がござりますの」

熱心にメモをしたためていく灰神楽。

しかし、途中でぴたりと手を止める。

灰神楽「それはおかしい」

レーツェル「難癖はおやめくださいませ。いくら同室だからといつて……」

灰神楽「レーツェルは『謎』という意味。皇軍がつけたコードネームのようなもの」

レーツェル「う……どうしてそれを。まさか鴉羽さん

から……？」

灰神楽「さっき、一緒にお風呂に入つてたから」

レーツエル「余計なことを……そ、それでも」

ぶつぶつ言いながらも、取り繕うように声を上げる。

レーツエル「お姉様の妹であることには、変わりありませんわ。わたくしがお姉様と呼び、灰桜お姉様はわ

たくしをレーツエルと呼ぶ。それだけで十分ですの」

灰神楽「ふむふむ……」

一度止めたメモを取る手を、再び動かし始めていた。

月下「偵察用人形、月光型の姉妹機。だから月下とい

うのであります」

夜風がふわりと吹き付ける。

屋上で空を眺めていた月下を尋ねて、質問を投げかけると、簡潔な答えが帰ってきた。

灰神楽「由来はそれだけ？」

月下「と聞いております。個体の識別。それが名前の最も重要な役割であります」

灰神楽「でも、それだけじゃないと聞いた」

月下「人間ならば、そういうこともあります。親

としての願いを込める」とも

灰神楽「人形は違う？」

月下「所詮道具でありますので」

灰神楽「そう……」

月下の隣で夜空の月を長めながら、どこか寂しげに声を上げる。

月下「ですが」

そんな灰神楽の声色を察したのか、月下は言葉を重ねた。

月下「道具であつたとしても、それ以上の存在になることもあります」

月下「道具であつたとしても、それ以上の存在になることもあります」

灰神楽「どう……やつて？」

月下「それは……」

月下「自分の横顔は真剣で、ただじつと月明かりを浴びていた。

月下「自分で探すしかない、と思うのであります」



竹箒を持つ手に、そっと灰桜が手を重ねる。

灰桜 「一緒に見に行つてみませんか？」

灰神楽 「名前のことが分からなくなつた……」

灰桜 「みゅ？」

翌朝。

灰桜の隣で竹箒を動かしながら、ひとり呟いた。

灰神楽 「昨日、みんなに名前の由来を聞いて回つたの」  
氣にしている様子の灰桜に、昨夜の経緯を説明する。

灰神楽 「お姉ちゃんにも聞きたかったけど、部屋に戻つたらもう寝ていたから……」

灰桜 「あはは……昨日はいっぱいお仕事をしたので、早くお休みしようと思いまして！」

苦笑して、やがて居住まいを正していた。

灰桜 「わたしの名前は、ナギさんがつけてくれたんですね。くすんだ桜色という意味があるのでそうです」

灰神楽 「桜色……」

灰桜 「灰神楽さんは、桜を知っていますか？」

灰神楽 「知識はある。でも実物は見たことがない

……」

灰桜 「では！」

そこには皇都を巡る用水路が造られており、小高い堤防が築かれている。

用水路沿いの並木道は桜の名所だ。春になると、昼は見物客で、夜は醉客で賑わいを見せる。

しかし今日は……。

灰神楽 「桜……色？」

小首を傾げている灰神楽。

秋の頃、そこに連なつてゐるのは青々とした葉桜だ。僅かに色づき、ぽつぽつと落葉が始まつてゐる。

灰桜 「桜の花は、春になると咲くんです。だからいます。くすんだ桜色という意味があるのでそうです」

灰神楽 「この木に、みんな花が咲く？」

灰桜 「そうなんです、わたしも一度見たことがあります。ですが、それはそれは素敵な光景でした」

灰神楽 「……」

じつと並木道を見上げている灰神楽。春を迎えたそ



の光景を、想像するよう。

灰桜「普段はこのようにさりげない風景ですが、ほんの一時でも誰かの心に咲くような、そんな存在になれたら……」

灰神楽「それが、お姉ちゃんの名前の由来？」

灰桜「いいえ、わたしがそんな風になれたると思つているんです」

ざわざわと桜の葉が揺れる。

微妙に、春を思わせるあたたかな薫りがした。

灰桜「灰神楽は灰煙という意味だけではありません。神樂には、神様に捧げる音……という意味があるそうです」

灰神楽「そう……なの？」

灰桜「簫星さんに教えてもらいました。それはきっと素敵な音色だと思います」

手を繋いだままで、灰桜はにつこりと微笑む。

灰桜「素晴らしい歌声を響かせる……例えば、そんな存在を目指してもいいと思うんです」

灰神楽「あ……」

灰桜の言葉に、はつとなつた様子で声を上げる。

灰神楽「そう……だね」

ほつとした面持ちで、柔らかな笑顔を向けていた。

灰神楽「いっぱい練習しなくちゃいけないね」

灰桜「一緒に練習しましょう！わたし、お付き合いします」

灰神楽「うん、もつと歌がうまくなつて、黒猫亭の一員になつて……」

どこか遠くを見つめるような瞳で、遙か先まで続く

桜並木を見つめていた。

灰神楽「いつか、みんなで桜を見られたらいいな」



『プリマドール 無名典礼』初回限定版特典  
interlude 総集編

## プリマドール 星語り

発行日  
2024年5月31日 発行

製作  
Key

発行所  
株式会社ビジュアルアーツ  
〒531-0073 大阪府大阪市北区本庄西 2-12-16 VA 第一ビル  
URL : [visual-arts.jp](http://visual-arts.jp)

編集  
株式会社ビジュアルアーツ

デザイン  
なかおよしえ

本書のコピー、スキャン、デジタル化の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても著作権法上認められおりません。  
落丁・乱丁本の交換などに関するお問い合わせは弊社（株式会社ビジュアルアーツ）までご連絡ください。送料は弊社負担でお取替えいたします。



KEY





~~KEY~~

